

41840

教科書文庫

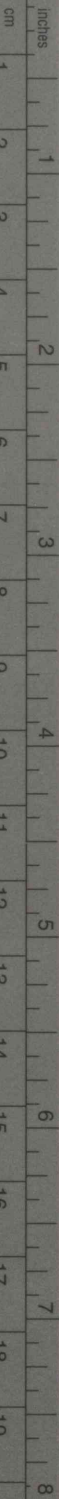
4
815.
41-1934
20000 38339

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

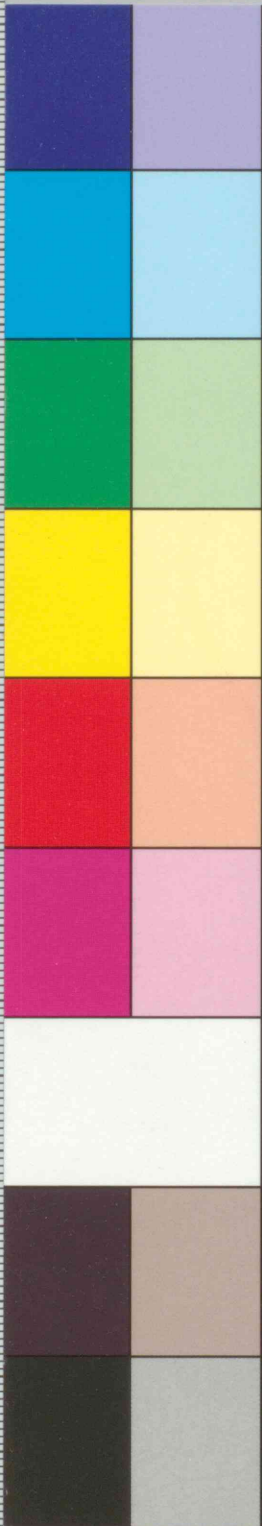
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

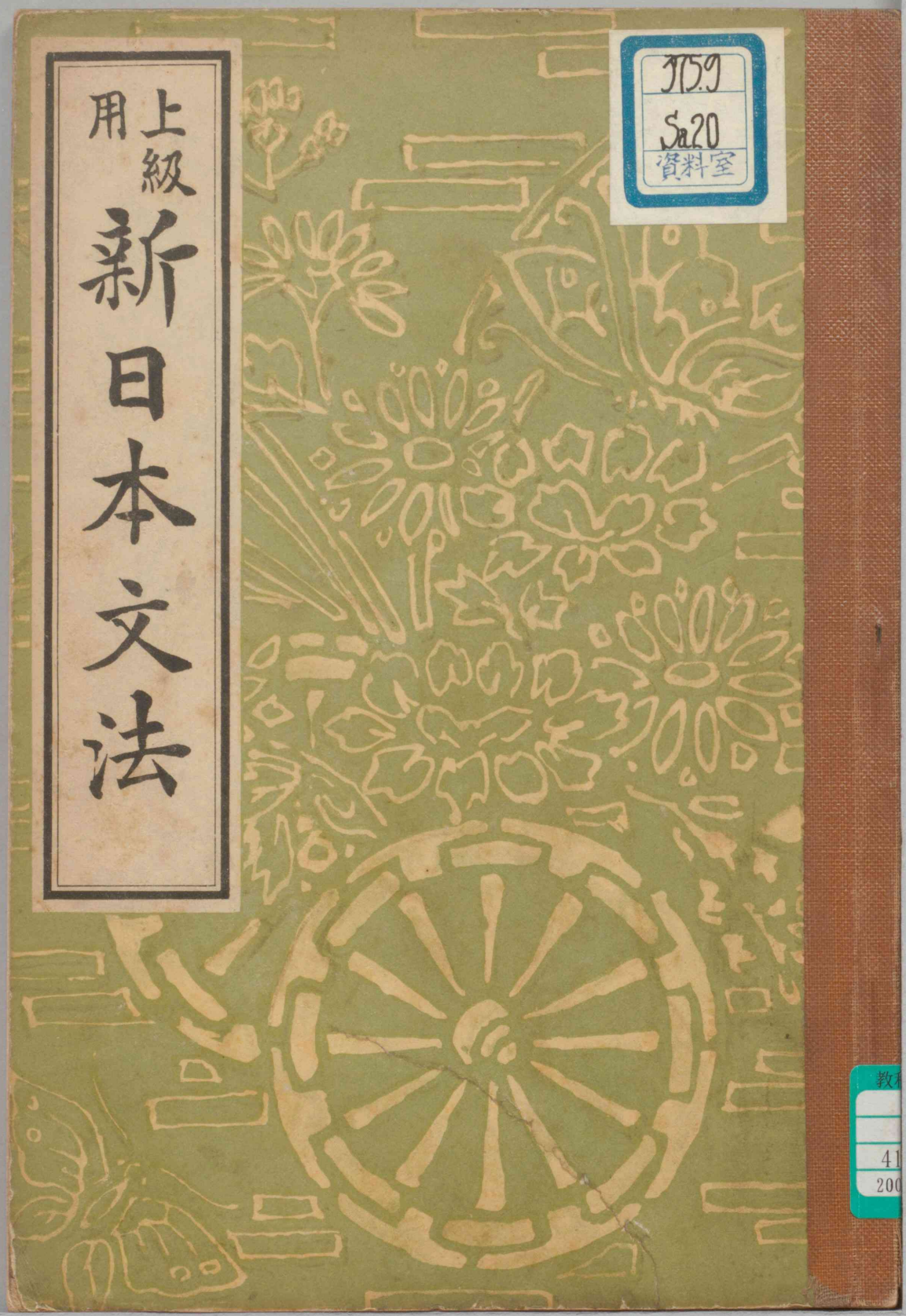
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



教科書文庫
41
200

3159
Sa20
資料室

用上級
新日本文法



昭和九年一月十七日
文部省檢定濟
中國學校國語文
科用

教科書文庫
4
815
41-1934
2000038333

資料室

3759
Sa20

佐藤正範著

上級
用
新
日
本
文
法

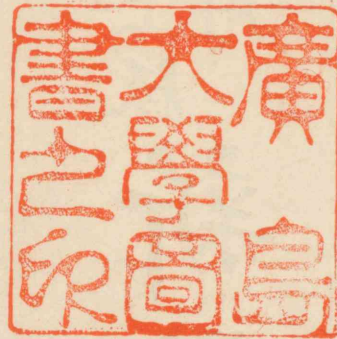


東京
山海堂出版部

広島大学図書

2000038333





緒言

- 一 本書は中學校教授要目に準據して、中學校に於ける上級用の國文法教科書として著作したものである。
- 二 本書は中學校教授要目の趣旨に基づき、國文法の全事項を組織的に整理し、文の構成に對する一般の智識を授けむことを期し、先づ總說より始めて音韻及び文字の大要を説き、次に品詞に入り、慣用變遷の順序に従ひ、文語より口語に進み、類推的對照的に文語と口語との異同を知らしめ、よく品詞の用法及び文章の作法等に練熟せしめ、實際日常使用の際に自在に適用せしめ、又よく他人の文章を正解せしめむことを期した。
- 三 本書は中學校に於ける生徒の學力の程度を考へ、煩瑣なる理論を避け、極めて平易簡明に説き、實用的を主とし、成るべく歸

納的・開發的に記述して、生徒の興味を喚起せむことに勉め、且國語の特色を理解せしめ、併せて國語愛護の精神を養はむことに意を用ひた。

- 四 本書は教材の分量及び按排に最も意を用ひ、生徒をして一部に偏せず、國文法の全般に通達せしめむことを期し、程よく全般の材料を理解し易く、教授し終へるやうに工夫酌量した。
- 五 本書は特に例題並に練習問題の材料の選擇に留意し、その材料を成るべく中學校用の國語讀本の程度のもの、及び日常生活に使用する實用的・修養的・趣味的のものを採り、又成るべく前後の聯絡を保ち、生徒の應用の才を養ひ、生徒をして始終愉快に學習せしめむことに力を用ひた。

著者識す

用上級 新日本文法 目次

第一篇 總說	一頁
一 言語 文字 文	一
二 國語 國文	一
三 口語 文語	二
四 文法	二
五 單語 品詞	三
六 主語 述語	四
七 文法説明の順序	四
第二篇 音韻	五
第一章 音韻の種類	五
一 母韻 父音 子音	五

二 撥音 促音……………六

三 拗音 長音……………六

第二章 音韻の變化……………七

一 通言 約音……………七

二 略音 延音……………七

三 添音 音便……………八

第三章 音韻の總括……………八

第三篇 文字……………九

第一章 假名……………九

第二章 漢字……………一

第三章 文字の總括……………三

第四篇 品詞……………四

第一章 名詞……………四

第一節 總說……………四

第二節 名詞の種類……………五

第三節 名詞の總括……………五

第二章 數詞……………六

第三章 代名詞……………七

第一節 總說……………七

第二節 代名詞の種類……………八

第三節 代名詞の總括……………一

第四章 動詞……………二

第一節 總說……………二

第二節 文語動詞の活用……………二

第三節 文語動詞の活用形……………四

一 未然形 二 連用形 三 終止形

四 連體形 五 已然形 六 命令形

第一 正格活用……………五

一 四段活用 二 上二段活用 三 下二段活用

四 上一段活用 五 下一段活用……………八

第二 變格活用……………八

一 か行變格活用 二 さ行變格活用
 三 な行變格活用 四 ら行變格活用
 第三 文語動詞活用形の總括……………三一
 第四節 口語動詞の活用形……………三三
 一 口語四段活用 二 口語上一段活用 三 口語下一段活用
 四 口語か行變格活用 五 口語さ行變格活用
 第五節 動詞の自他……………三八
 第六節 動詞の音便……………四〇
 第七節 動詞語尾の假名遣……………四三
 第八節 動詞の總括……………四五
 第五章 形容詞……………四七
 第一節 總 說……………四七
 第二節 文語形容詞の活用……………四八
 第三節 文語形容詞の活用形……………四八
 一 く活用 二 しく活用
 第四節 口語形容詞の活用形……………四九

第五節 形容詞の音便……………五〇
 第六節 形容動詞……………五二
 第七節 形容詞の總括……………五三
 第六章 助動詞……………五四
 第一節 總 說……………五四
 第二節 文語助動詞の種類……………五五
 一 受身の助動詞……………五六
 二 可能の助動詞……………五六
 三 自發の助動詞……………五八
 四 使役の助動詞……………五八
 五 尊敬の助動詞……………五九
 六 時の助動詞……………六〇
 (一)完了の助動詞 (二)過去の助動詞 (三)未來の助動詞
 七 推量の助動詞……………六四
 八 指定の助動詞……………六六
 九 詠歎の助動詞……………六七

一〇	打消の助動詞	六八
一一	希望の助動詞	六九
一二	比喩の助動詞	七〇
	第三節 口語助動詞の種類	七二
一	口語受身の助動詞	七二
二	口語可能の助動詞	七三
三	口語自發の助動詞	七三
四	口語使役の助動詞	七四
五	口語尊敬の助動詞	七四
六	口語時の助動詞	七五
七	口語推量の助動詞	七六
八	口語指定の助動詞	七七
九	口語打消の助動詞	七八
一〇	口語希望の助動詞	七八
一一	口語比喩の助動詞	七九
	第四節 助動詞相互の接続	八〇
	第五節 助動詞の總括	八一

第七章 助詞

第一節	總説	八二
第二節	助詞の種類	八三
第一類	名詞・數詞・代名詞に添ふ助詞	八三
第二類	動詞・形容詞・助動詞に添ふ助詞	八七
第三類	種々の品詞に添ふ助詞	九一
第三節	助詞の總括	九五

第八章 副詞

第一節	總説	九六
第二節	副詞の種類	九七

第九章 接續詞

第一節	總説	九八
第二節	接續詞の種類	九九

第十章 感動詞

第十一章	品詞の轉成	一〇一
------	-------	-----

第十二章	頭尾語	一〇四
第一類	接頭語	一〇四
第二類	接尾語	一〇五
第五篇 文章		
第一章	文の成分	一〇六
第一節	主語 述語	一〇六
第二節	客語 補語	一〇七
第三節	修飾語	一〇八
第四節	文 主	一〇八
第五節	獨立語	一〇九
第二章	文の成分の位置	一一〇
第一類	文の正叙法	一一〇
第二類	文の倒叙法	一一一
第三類	文の略叙法	一一一
第三章	文の句及び節	一一三
第一節	文の句	一一三

第二節	文の節	一一四
第四章	文の係結	一一五
第一類	ぞなむやかの係結	一一五
第二類	こそその係結	一一六
第五章	文の呼應	一一七
第六章	文の構造上の種類	一一九
第一類	單文	一一九
第二類	複文	一二〇
第三類	重文	一二〇
第七章	文の性質上の種類	一二〇
第一類	平叙文	一二一
第二類	疑問文	一二一
第三類	命令文	一二一
第四類	感歎文	一二二
第八章	文章の總括	一二二

附表

- 第一表 文語動詞・口語動詞 活用對照表
- 第二表 文語形容詞・口語形容詞 活用對照表
- 第三表 文語助動詞・口語助動詞 活用對照表

目次終



用上級 新日本文法

佐藤正範 著

第一篇 總說

一 言語文字文

言語 人の音聲に依つて思想を表すものを言語といふ。言語を書き
 文字 表す符號を文字といふ。言語又は文字を用ひて、一つの纏つた
 文章 思想を表したものを文又は文章といふ。

二 國語國文

國語 世界各國には皆それ／＼特殊の言語があつて、それをその國の
 國語といふ。文章も各國それ／＼特殊のものがあつて、それを

國文

その國の國文といふ。従つて日本語は即ち我が國の國語であり、日本文は即ち我が國の國文である。

三 口語文語

口語 文語

言語と文章とは元來同一であつて、現今も一致してゐるものもあるが、我が國では古來段々變遷し、相遠ざかつて、現今はその形式用法が異なつてゐるものが多い。その談話に用ひる言語を口語といふ。その文章に用ひる言語を文語といふ。

四 文法

文法

口語及び文語は、それ／＼一定の法則があつて、その法則を文法といふ。文法を知れば、自己の思想を正しく言ひ表し、書き表す便宜があり、又他人の言語文章をも正しく理解する便宜がある。

五 單語品詞

單語 品詞

一 勉強は幸福を生む母なり。

二 日本は萬世一系の國體である。

右の例の如く、傍線を引いてある一つ／＼の語は、或意味を表してゐて、これを單語といふ。單語をその意義や形態や職能等より、左の十種に分類することが出来る。その各を品詞といふ。

- (一) 名詞
- (二) 數詞
- (三) 代名詞
- (四) 動詞
- (五) 形容詞
- (六) 助動詞
- (七) 助詞
- (八) 接續詞
- (九) 副詞
- (十) 感動詞

以上の品詞を集めて、一つの纏つた思想を表したものは文即ち文章であつて、その品詞を文章の方面からは文の成分といふ。文の成分の最も主なるものは主語及び述語である。

文の成分

六 主語 述語

一 日輝く。

二 花が美しい。

右の例では、文中の叙述される語と、叙述する語との二種の部分より成つてゐる。その叙述される語、即ち文章の主題となる語を**主語**といふ。又その叙述する語、即ち文章の主題に就いて叙述する語を**述語**又は**説明語**といふ。文章は何れもこの主語と述語との二要素を含まぬものはない。

主語
述語
説明語

七 文法説明の順序

文法を説くに、最も重要なものは、品詞と文章との部分であるが、それを説く前に、言語の要素たる**音韻**及び言語を發表する**文字**

に關する事項を説き、次いで**品詞**の部に入り、進んで**文章**の部に入つて説くが便宜であるから、以下その**順序**に説明する。

第二篇 音韻

第一章 音韻の種類

人の發する音聲の數は多いが、左の**七種**に分けることが出来る。

一 母韻 父音 子音

あいうえおの五音は單純な音で、諸音の韻ひびきともなるから、これを**母韻**といふ。くすつぬふむゆるうの九音より、各うの母韻を除き去つた發聲を**父音**といふ。我が國では普通には父音の文字を用ひないが、羅馬字で書き表す KU, SU, TSU 中の K, S, TS は父音の文字である。五十音圖のか行以下四十五音の父音と母韻

母韻
父音

子音

二 撥音 促音

撥音
促音

と合せた音を子音といふ。
鼻腔を通つて出る、撥ねるやうな音を撥音といふ。撥音はん
文字で表す。又口内に促つて出る一種の音を促音といふ。促
音はつゝの文字で表す。

三 拗音 長音

拗音
長音

きやきゆきよの音の如く、二音連ねて一音に發する音を拗音と
いふ。又テールポートの如く、音聲を長く引く音を長音
といふ。

練習

練習 左の文中の母韻撥音・促音・拗音・長音を指摘せよ。

- (一) その形はまつたくコップ(洋盃)の如し。
- (二) 酒類にはアルコール(酒精)分を含めり。

通音
約音

略音

- (三) 彼に問うて意見を聞いて行かん。
- (四) 私の言ひたいことを言つてよいか。
- (五) 願つたり叶つたりとはこの事であらう。

第二章 音韻の變化

一 通音 約音

き。か。げ(木陰)の。こ。が。け。と。か。ね。も。の(金物)の。か。な。も。の。と。は。る。あ。め(春
雨)の。は。る。さ。め。と。な。つ。た。類。の。或。音。が。五。十。音。圖。の。同。行。又。は。同。段。の
音。に。通。じ。た。も。の。を。通。音。と。い。ふ。 さ。し。あ。ぐ。の。さ。さ。ぐ。と。よ。く。あ。れ
の。よ。か。れ。と。な。つ。た。類。の。二。音。を。一。音。に。約。し。た。も。の。を。約。音。と。い。ふ。

二 略音 延音

は。ち。す。の。は。す。と。み。づ。ぎ。は。の。み。ぎ。は。と。な。つ。た。類。の。或。音。を。略。し。た
も。の。を。略。音。と。い。ふ。 う。つ。る。の。う。つ。ろ。ふ。と。い。ふ。の。い。は。く。と。な。つ

延音

三 添音 音便

添音
音便

た類の、或音を延したものを延音といふ。
むか(六日)のむい。かと、しじ(四時)のしい。じと、あらずばのあらずん。ばとなつた類の、或音を添へたものを添音といふ。開きての開いて、と思ひての思うてと、善き人の善い。人となつた類の、音聲を連呼する際に、發音の便宜に因つて變化した音を音便といふ。

第三章 音韻の總括

總括

以上の音韻の事項を總括すれば左表の通りである。

音韻表

音韻	(一)種類	(二)母韻	(三)父音	(四)撥音
	(二)變化	(一)通音	(二)約音	(三)略音
	(五)添音	(一)音便	(二)音便	(四)延音

練習

練習 左の文中の音韻の變化したものの種類を言へ。

- (一) みなそこに沈める珠をもたげたり。
- (二) 山のはの月を見つゝかたらへり。
- (三) ふづくゑの上のふばこよりふまきをとうでたり。
- (四) たなごころ(掌)を打つて喜んだ。
- (五) みつか(三日)に借りたあまぐ(雨具)をやうか(八日)に返した。

第三篇 文字

假名 漢字

言語は人の口より耳に傳へるのであるが、人は文字を用ひて、思想を發表する場合も甚だ多い。我が國で古來普通一般に用ひてゐる文字は假名と漢字とである。

第一章 假名

片假名 平假名

我が國特有の文字は假名で、假名に片假名と平假名との區別がある。これを一定の順序に排列したものは五十音圖である。

五十音圖
清音假名
濁音假名
半濁音假名
五十音圖の表

五十音圖は文法の基礎として甚だ大切である。清音假名の外に濁音假名半濁音假名もある。五十音圖は左表の通りである。

假名五十音圖の表

ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	片假名	
ン	フ	ン	フ	ン	フ	ン	フ	ン	フ		
キ	リ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	平假名	
ウ	ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ		
エ	レ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	オ段	
ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ		
ん	わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ	平假名
り	い	み	ひ	に	ち	し	き	い			
う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う		オ段
ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え		
を	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お		オ段

濁音假名 濁音の假名はカ行サ行タ行にあつて、ガギがぎ、ザジざじ、ダヂだぢの如く、「」の濁音符を加へて表す。

半濁音假名 半濁音の假名はハ行のみにあつて、バビばびの如く、「。」の半濁音符を加へて表す。

第二章 漢字

我が國の文章は假名と漢字とを交へて書く習慣で、漢字をも正しく書かねばならぬ。漢字はその數甚だ多く、記憶の困難もあるが、一般通用の文字をば、左の如く正しく書く必要がある。

- 一 字畫の區別 例へば快と快と、又待と侍と、又戒と戎と、又功と巧となどは、字畫を區別して正しく書かねばならぬ。
- 二 類字の辨別 例へば己と巳と、又戊と戌と、又鳴と鳴となどは、類字を區別して正しく書かねばならぬ。
- 三 慣用文字の使用 例へば品柄、天晴、甲斐、兎角などは、我が

漢字
字畫
類字
慣用文字

和字

漢字の讀法

音讀 訓讀
吳音 漢音
唐音

音讀訓讀の例

送假名法

國從來の慣用の文字で、慣例に従つて使用せねばならぬ。

四 和字の使用 例へば畑、畠、辻、峠、嶋、風、躰、米、突、哩、瓦などは、漢

字に類する和字で、慣例に従つて使用せねばならぬ。

漢字の讀法 漢字には音讀するものと訓讀するものとある。

音讀するものには吳音漢音唐音の區別があり、その中には一致するものもあるが、又文字の意義に因つて、その音讀法の異なるものもある。此等の漢字を讀み且使用するには、すべて從來使用の慣例に據らねばならぬ。その例左の如くである。

音讀	一 吳音	京 <small>キヤウ</small> 行 <small>ギヤウ</small> 明 <small>メイ</small>	訓音	京 <small>キヤウ</small> 行 <small>ギヤウ</small> 明 <small>メイ</small>
	二 漢音	京 <small>キヤウ</small> 行 <small>ギヤウ</small> 明 <small>メイ</small>		城 <small>シヨウ</small> 行 <small>ギヤウ</small> 日 <small>ニチ</small>
	三 唐音	京 <small>キヤウ</small> 行 <small>ギヤウ</small> 明 <small>メイ</small>		人 <small>ヒト</small> 行 <small>ギヤウ</small> 月 <small>ツキ</small>

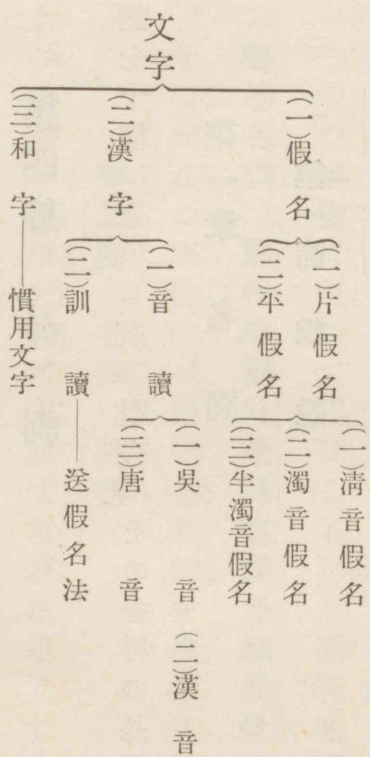
送假名法 右の如く漢字を訓讀するものもの下に、行か行き行く

行けなどと、假名を送つて識別する方法を送假名法といふ。

第三章 文字の總括

總括

以上の文字の事項を總括すれば左表の通りである。



練習 左の文中の音讀及び訓讀の慣用法を言へ。

- (一) 伊勢の神宮は尊嚴なる趣あり。
- (二) 京都には莊嚴なる寺院多し。

練習

- (三) 西行法師は行脚の行動を成したりき。
- (四) 經書と經文とは讀方が違ふ。
- (五) 萬が一にも殿上人であるまいかと思つた。

第四篇 品詞

品詞

品詞を十種に分類し、以下順次にその各種の品詞を説く。

第一章 名詞

第一節 總説

- 一 勉強は幸福を生む母なり。
 - 二 明治神宮の祭神は明治天皇なり。
 - 三 日本は氣候溫和で風景に富んでゐる。
- 右の例の傍線を施した語は事物の名稱を表してゐる。

名詞

定義 事物の名稱を表すに用ひる語を名詞といふ。

第二節 名詞の種類

名詞を左の二種に分けることが出来る。

- 一 固有名詞 明治神宮 明治天皇 日本 日本海 明治維新 など、或一つの事物に限つて用ひる名詞を固有名詞といふ。
- 二 普通名詞 勉強 幸福 母 祭神 氣候 溫和 風景 海 年號 など、同種類の何れの事物にも用ひる名詞を普通名詞といふ。

第三節 名詞の總括

以上の名詞の事項を總括すれば左表の通りである。

總括
名詞表
練習

練習 左の文中の名詞の種類を言へ。

名詞

- (一) 總説
- (二) 種類
 - (一) 固有名詞
 - (二) 普通名詞

- (一) 伊勢の太廟は天照大神を祭れる神宮なり。
- (二) 進みゆく昭和の御代に生れたるは至幸至福なり。
- (三) 吉野山霞の奥は知らねども見ゆる限は櫻なりけり。
- (四) 我が日本は歐米諸國にも類のない國體を有してゐる。
- (五) 土佐日記は紀貫之の記した紀行の書である。

第二章 數詞

- 一 千里の道も一步より始る。
 - 二 吾が友は二百人中の第二番の成績を得たり。
 - 三 五臺の飛行機は何れも午後三時に着いた。
- 右の例で、**千里一步二百人五臺**は事物の數量を表し、**第二番三時**は事物の順序を表してゐる。

數詞

練習

定義 事物の數量又は順序を表す語を數詞といふ。

練習 左の文中の數詞を指摘せよ。

- (一) 我が國は三千年の光輝ある歴史を有し、世界五大國の一に數へらる。
- (二) 彼は指を屈して、とをはたち、みそちと數へたり。
- (三) 五月の二日又は三日を八十八夜といふ。立春より八十八日目の意なり。
- (四) 第一師團は三月二十五日午前八時に下關を出發した。
- (五) 五十鈴川の水は千代に八千代に清らかである。

第三章 代名詞

第一節 總説

- 一 我は貴君と共に彼を訪問せむ。
- 二 これはそれとは似たれどもあれとは異なり。
- 三 こゝもそこも花盛りで、今はどこも同様であらう。

右の例の傍線を引いてある語は、皆名詞の代りとして用ひられてゐる。

定義 人や事物の名稱の代りに用ひる語を代名詞といふ。

第二節 代名詞の種類

代名詞を左の二種に分けることが出来る。

代名詞

一 人代名詞 我已汝あなた彼誰など、人の名の代りに用ひる

語を人代名詞といふ。人代名詞に左の四種がある。

自稱

(一) 自稱 我已私余拙者など、自己の名の代りに用ひる語を自稱又は第一人稱の人代名詞といふ。

對稱

(二) 對稱 汝あなたおまへ貴君など、對手の名の代りに用ひる語を對稱又は第二人稱の人代名詞といふ。

他稱

(三) 他稱 彼あれあのかたなど、自己と對手との他の、或人の名の

不定稱

代りに用ひる語を他稱又は第三人稱の人代名詞といふ。

(四) 不定稱 誰どなた某など、それと確定しない人の名の代りに用ひる語を不定稱の人代名詞といふ。

附説 (一) 君僕私大人小子等の人代名詞は、名詞より轉來したものである。

る。人代名詞はこのやうに、名詞より轉來したものがあ

(二) 自稱のおのれは或は對稱にも用ひられ、不定稱の某は或は自

稱にも用ひられるなど、代名詞は轉用するものもある。

(三) 人代名詞は貴賤上下親疎の間に、種々用法の慣例があるから、

その用法を正しくせねばならぬ。

指示代名詞

二 指示代名詞 これそこあちどちらなど、事物場所方向の名

の代りに指示する語を指示代名詞といふ。指示代名詞に

左の四種がある。

近稱

中稱

遠稱

不定稱

(一) 近稱 これこゝこなたこちなど、自身に最も近い事物、場所、方向の名の代りに指示する語を近稱の指示代名詞といふ。

(二) 中稱 それこそなたそちなど、自身より稍離れた事物、場所、方向の名の代りに指示する語を中稱の指示代名詞といふ。

(三) 遠稱 かれあれあそこかなたあちなど、自身より最も遠い事物、場所、方向の名の代りに指示する語を遠稱の指示代名詞といふ。

いふ。

(四) 不定稱 いづれいづこいづかたどちらなど、不定・不明な事物、場所、方向を指示する語を不定稱の指示代名詞といふ。

附説 以上の近稱のこなたこちは自稱の人代名詞に、又中稱のそなたそち、遠稱のあなたは對稱の人代名詞に、又不定稱のどなたは不定稱の人代名詞に轉用せられこともある。

以上説いた名詞・數詞・代名詞を併せて、文の主體となる意味で體言といひ、文法上その語を用ひる場合がある。

體言

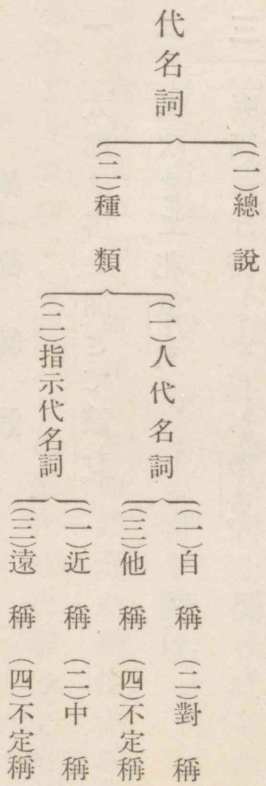
總括

代名詞表

練習

第三節 代名詞の總括

以上の代名詞の事項を總括すれば左表の通りである。



練習 左の文中より代名詞を指摘し、且その種類を言へ。

- (一) その説を聞くもの、いづれも彼の博學に驚歎せり。
- (二) この山のあなたによき風景あれば其處に案内せむ。
- (三) 諸君はいづれの方法を如何に實行せむとするか。

- (四) それはそこに、あれはこゝに、だれか持つて来なさい。
- (五) 彼は何處の誰であるか、私はそれを知りません。

第四章 動詞

第一節 總説

- 一 太郎は書を開きて讀む。
- 二 風吹きて花散る。
- 三 庭園には美しい花がある。

右の文例で、開き讀むは有爲的動作を表し、吹き散るは或物の自然的作用を表し、又あるは物の存在を表してゐる。

定義 事物の動作又は存在等を表す語を動詞といふ。

第二節 文語動詞の活用

動詞

か(未然形) (あ段) 太郎は書を開かむ。

き(連用形) (い段) 太郎は書を開き始む。

く(終止形) (う段) 太郎は書を開く。

く(連體形) (う段) 太郎は書を開く時なり。

け(已然形) (え段) 太郎は書を開けばそれを讀む。

け(命令形) (え段) 文法の書を開け。

開

動詞は右の例の如く、何れもその語形の變化する部分と、變化せぬ部分より成つてゐる。その變化せぬ部分を語根又は語幹といひ、變化する部分を語尾といひ、その變化する作用を動詞の活用といひ、又動詞のはたらきともいふ。

用言 右の如く、動詞は多くは事物の作用を表すから、次章の形容詞をも合せ、體言に對して、これを用言といふ。

語根 語幹
語尾 活用
はたらき
用言

動詞の活用形

動詞の活用段

未然形

連用形

終止形

連體形

已然形

第三節 文語動詞の活用形

各の動詞の變化する作用は左の六種である。これを動詞の活用形といひ、又動詞の活用段ともいふ。

一 未然形 前節の例で、開かは動作の未だ成立しない事項を豫めいふ語形であるから、これを未然形といふ。

二 連用形 又開きは多く用言に言ひ連ねる語形であるから、これを連用形といふ。

三 終止形 又開くは文を終止する語形であるから、これを終止形といふ。

四 連體形 又開く時の開くは、體言に言ひ連ねる語形であるから、これを連體形といふ。

五 已然形 又書を開けばの開けは、動作の已に成立した事項

命令形

四段活用

を表す語形であるから、これを已然形といふ。

六 命令形 又書を開けの開けは、命令する意味を表す語形であるから、これを命令形といふ。

右の如き活用形の方面より、動詞を正格活用の五種と、變格活用の四種とに分類することが出来る。

第一 正格活用

一 四段活用 開か開き開く開けの如く、動詞の語尾が五十音圖のあいうえの四段に活用するものを四段活用といふ。咲く記す分つ思ふ好む送るなどの語はこの活用である。

附説

(一) 四段活用は五十音圖のかさたはまらの六行、及び濁音のがはの二行にある。動詞の中でこの活用の語が最も多い。

(二) 此等の動詞はその活用する五十音圖の行に依つて、か行四段

上二段活用

活用さ行四段活用などといつてゐる。

二 上二段活用 起き起く起くる起くれ起き(よ)の如く、動詞の語尾が五十音圖のいうの二段に活用し、且う段にるの添うて活用するものを上二段活用といふ。生く落つ用ふ試む老ゆ懲るなどの語はこの活用である。

但し起き(よ)は助詞のよを添へたもので、類例次にもある。

附説 (一)上二段活用はかたはまやらの六行及び濁音のがだはの三行

にある。動詞の中でこの活用の語は少い。

(二)右の起くは口語では起きる、又起くる起くれは口語では起きる起きれなどと活用するが、それは口語の部で説く。

下二段活用

三 下二段活用 受け受く受くる受くれ受け(よ)の如く、動詞の語尾が五十音圖のえうの二段に活用し、且う段にるの添

うて活用するものを下二段活用といふ。得授く載す捨つ尋ぬ教ふ始む榮ゆ流る植うなどの語はすべてこの活用である。

附説 下二段活用は五十音圖の各行にある。動詞の中でこの活用の

語が、四段活用の語に次いで多い。

上一段活用

四 上一段活用 き(着)き(着)るき(着)れき(着)よの如く、動詞の語尾が五十音圖のいの一段のみに活用し、且これにるの添うて活用するものを上一段活用といふ。着る似る干る見る射る居るなどの語はこの活用である。

附説 上一段活用はかなはまやわの六行にある。動詞の中でこの活用の語は甚だ少い。

下一段活用

五 下一段活用 け(蹴)け(蹴)るけ(蹴)れけ(蹴)よの如く、動詞の語尾

が五十音圖のえの一段のみに活用し、且これにるの添うて活用するものを下一段活用といふ。

附説 下一段活用は通用語では蹴るの一語のみである。

練習

練習 左の文中の動詞を指摘し、その活用の名を言へ。

- (一) 塵も積れば山となる。
- (二) 恩を受けては必ず報いよ。
- (三) 身を立て道を行ひ、名を後世に揚ぐべし。
- (四) 後に山を顧み、前に川を眺めて、平原に出でたり。
- (五) 雪降りて年の暮れぬる時にこそつひにもみぢぬ松も見えけれ。(作者不明)

第二 變格活用

か行變格活用

一 か行變格活用 こ(來)き(來)く(來)る(來)れ(來)よの如く、動詞の語尾が、おいうの三段に活用し、且そのう段の音に

れの添うて活用するものをか行變格活用といふ。

附説 か行變格活用は來の一語のみである。語形はか行上二段活用に似てゐるが、この活用があるが特殊である。か行上二段活用に對して、この活用をか行變格活用といつてゐる。

さ行變格活用

二 さ行變格活用 せ(爲)し(爲)す(爲)る(爲)れ(爲)よの如く、動詞の語尾が、えいうの三段に活用し、且そのう段の音にれの添うて活用するものをさ行變格活用といふ。この活
用には轉來の語もある。

附説 さ行變格活用は本來の語はす(爲)おは(在)すの二語のみであるが、心ず旅すの如きは名詞に連結し、全くす正しくずは形容詞に連結し、發す勉強すは漢語に連結して、この活用をなすものである。

な行變格活用

三 な行變格活用 往(な)往(往)ぬ(往)ぬる(往)ぬれ(往)ねの如く、動

詞の語尾があいうえの四段に活用し、且そのう段の音にるの添うて活用するものをな行變格活用といふ。

附説 な行變格活用は往ぬ死ぬの二語のみである。語形は四段活用に似てゐるが、るの添ふことが特殊である。な行四段活用に對して、この活用をな行變格活用といつてゐる。

ら行變格活用

四 ら行變格活用 有ら有り有る有れの如く、動詞の語尾があいうえの四段に活用し、い段で語の終止するものをら行變格活用といふ。

附説 ら行變格活用は有り居り侍りの三語のみである。語形はら行四段活用に似てゐるが、左の例の如く、語の終止する際にるでなく、りであることが特殊である。

(一) ら行四段活用 學友相約して山に登る。

總括

文語動詞活用表

第三 文語動詞活用形の總括

(二) ら行變格活用 人は各その望む事あり。

以上の文語動詞活用形の事項を總括すれば左表の通りである。

種類	活用	語根	未然形	連體形	終止形	連體形	已然形	命令形
四段	上二段	開	か	き	く	く	け	け
二段	下二段	起	き	き	く	くる	くれ	きよ
一段	上一段	受	け	き	く	くる	くれ	けよ
一段	下一段	(着) 蹴	け	き	ける	ける	けれ	けよ
變格	か行變格	(來)	こ	き	く	くる	くれ	こよ
變格	さ行變格	(爲)	せ	し	す	する	すれ	せよ
變格	な行變格	往	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
變格	ら行變格	有	ら	りに	りぬ	るぬる	れぬれ	れね

附表 以上の表は活用の各種類に互つて、最も簡明に表したもので、委しくは卷末の附表に記載してある。

練習

練習 一 左の文中の動詞を指摘して、その活用の種類を言へ。

- (一) 賢者は治に居て亂を忘れず。
- (二) 熱心に研究すれば、學業日に進む。
- (三) 朝は五時に起き、夜は十時に臥す。
- (四) 四川を渡り、山を越ゆれば、市街も見ゆ。
- (五) 皇國の興廢この一戦にあり。各員一層奮勵努力せよ。

二 左の文中の動詞を指摘して、その活用形の名を言へ。

- (一) 來るものをば拒まず、去るものをば追はず。
- (二) 絶えず流るゝ清水は、晝夜に止むことなし。
- (三) 事の成るはよく難きに堪へ忍ぶにあり。
- (四) 人は己を盡し、人を咎めず、わが誠の足らざるを尋ねべし。
- (五) 大空にそびえて見ゆる高嶺にも、登れば登る道はありけり。(明治天皇)

三 左の文中の動詞を指摘して、その活用の誤を正せ。

- (一) 余は少しも足の疲るを覺へず。
- (二) 砲臺を構え、大砲を据へついたり。
- (三) 約束を違ふときは、信用を失なふなり。
- (四) 知らぬ事は問え、問うを恥するべからず。
- (五) 我が言う事を用いずは、後に悔いることあらむ。

第四節 口語動詞の活用形

口語の動詞は文語の動詞より變遷したもので、文語の動詞と活用形が類似してゐるが、その種類が減少して、左の五種に分けることが出来る。

- 一 口語四段活用 口語の四段活用の動詞は、文語の四段活用の動詞と同形で、文語のな行變格活用ら行變格活用の動詞も、口語では四段活用になつてゐる。今その文語と口語と

口語四段活用

の活用形を對照すれば、左表の例の通りである。

四 段	な 行 變 格	四 段	ら 行 變 格	四 段		四 段		活 用
				口 語	文 語	口 語	文 語	口 語
死	死	有	有	成	成	語 根	語 根	未 然 形
な	な	ら	ら	ら	ら	連 用 形	連 用 形	連 用 形
ぬ	ぬ	る	り	る	る	終 止 形	終 止 形	終 止 形
ぬ	ぬ	る	る	る	る	連 體 形	連 體 形	連 體 形
ね	ぬ れ	れ	れ	れ	れ	假 定 形	假 定 形	假 定 形
ね	ね	れ	れ	れ	れ	命 令 形	命 令 形	命 令 形

口語の特殊

右の如く、文語のら行變格の終止形有りは、口語では有るとなり、又文語のな行變格の連體形死ぬるは、口語では死ぬとなり、その已然形死ぬれは、口語では假定形の死ぬとなるが特殊である。假定形 文語動詞の已然形は、口語動詞では假定形といふ。

口語上一段活用

二 口語上一段活用

文語の上一段・上二段の動詞は、口語では共に上一段に活用すること、左表の例の通りである。

活 用	口 語	文 語	語 根	未 然 形	連 用 形	終 止 形	連 體 形	假 定 形	命 令 形
上一段	口語	文語	(見)	み	み	みる	みる	みれ	みよ
上一段	口語	文語	(見)	み	み	みる	みる	みれ	みよ
上二段	口語	文語	盡	き	き	きる	きる	きれ	きよ
上一段	口語	文語	盡	き	き	きる	きる	きれ	きよ

口語の特殊

右の如く、文語上二段活用の終止形の盡く、連體形の盡くるは、口語では盡きるとなり、已然形の盡くれは、假定形の盡きれとなるが特殊である。

口語下一段活用

三 口語下一段活用

文語の下一段・下二段の動詞は、口語では共に下一段に活用すること、左表の例の通りである。

口語の特殊

右の如く、文語下二段活用の終止形の受く、連體形の受くるは、口語では共に受けるとなり、已然形の受くれは、假定形の受けれとなるが特殊である。

口語か行變格活用

四 口語か行變格活用 口語か行變格の動詞は、文語か行變格の動詞とは、終止形の異なること、左表の通りである。

活用	口文語	口語	語根	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形(多)	命令形
下一段	口語	文語	(蹴)	け	け	ける	ける	けれ	けよ
下二段	口語	文語	(蹴)	け	け	ける	ける	けれ	けよ
下一段	口語	文語	(蹴)	け	け	ける	ける	けれ	けよ
下二段	口語	文語	(蹴)	け	け	ける	ける	けれ	けよ

活用	口文語	口語	語根	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形(多)	命令形
か行變格	口語	文語	(來)	こ	き	くる	くる	くれ	こい
か行變格	口語	文語	(來)	こ	き	くる	くる	くれ	こよ
か行變格	口語	文語	(來)	こ	き	くる	くる	くれ	こい
か行變格	口語	文語	(來)	こ	き	くる	くる	くれ	こよ

口語の特殊

右の如く、文語の終止形くは、口語ではくるとなる。又命令を表すには文語ではこよ、口語ではこいとなるが特殊である。

口語さ行變格活用

五 口語さ行變格活用 口語さ行變格の動詞は、文語さ行變格の動詞とは、未然形終止形の異なること、左表の通りである。

活用	口文語	口語	語根	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形(多)	命令形
さ行變格	口語	文語	(爲)	し	し	する	する	すれ	せよ
さ行變格	口語	文語	(爲)	し	し	する	する	すれ	せよ
さ行變格	口語	文語	(爲)	し	し	する	する	すれ	せよ
さ行變格	口語	文語	(爲)	し	し	する	する	すれ	せよ

右の如く、文語の未然形せは、口語ではせ又はしとなり、終止形すは、するとなるが特殊である。

練習

練習 一 左の動詞の文語と口語との活用形の差異を言へ。
(一) 生く (二) 生ゆ (三) 生す (四) 植う (五) 生長す

二 左の文中の口語動詞を指摘し、活用名・活用形を言へ。

- (一) 棄てる神があれば、助ける神がある。
- (二) 自分の嫌ふことを他人に強ひるな。
- (三) 親切に教へる人には、來て學ぶ人が絶えない。
- (四) 敵軍の兵士は一方に血路を求めて、逃げようとした。
- (五) 朝早く起きて、叢の間を見ると、露は綺麗に見渡される。

三 左の文中の口語動詞を指摘して、活用の誤を正せ。

- (一) 約束を違えれば、信用を失なうであらう。
- (二) あの鳥の生くるだけは生かしてやりたい。
- (三) 喜びすぎて夢中になつては事を誤まるよ。
- (四) 財寶は盡くることがあつても、芳名は朽つることない。
- (五) 木を攀じ谷を越へ、彼方に聳へた山に登ろうとした。

第五節 動詞の自他

以上は動詞を語形より分類したものであつて、これを性質上よりは、左の二種に分けることが出来る。

自動詞

- 一 自動詞 花咲く、鳥鳴くの咲く、鳴くの如く、動詞の表す動作が、他の事物に及さぬ語を自動詞といふ。

他動詞

- 二 他動詞 「生徒書を讀む」の讀む、「生徒文法を學ぶ」の學ぶの如く、動詞の表す動作が、他の事物に及す語を他動詞といふ。

注意 「門自ら閉づ」「彼は門を閉づ」の閉づの如く、動詞は自動詞。

他動詞何れにも用ひられるものもあるが、此等は意味に依つて判定するのである。又書を取り出でて讀む」の出で」の如く、自動詞を他動詞に轉用するものもあるが、此等は一定の慣例に依るもので、その用例は少い。

練習

練習

- 一 左の文中の自動詞と他動詞とを指摘せよ。

動詞の音便

- (一) 白雲峰に懸りて、樹木を蔽へるを見たり。
 - (二) 人事を盡して天命を待たば、心に憂ふるに足らず。
 - (三) 視れども見えず、聽けとも聞えず、食へどもその味を知らず。
 - (四) 祝祭日には必ず國旗が立つてゐる。
 - (五) 文を作つて自ら心を慰める料とした。
- 二 左の文中に誤あらばこれを正せ。
- (一) 空しく一日を過ぎたるを悔ゆ。
 - (二) 遙に見るは雲か山か、何れとも知れ難し。
 - (三) 彼は用意を整ひ、豫定の課業を終りたり。
 - (四) 本日の課業が全く終へた。
 - (五) 方法を違ひて、種々の困難が起きた。

第六節 動詞の音便

動詞の語尾が接續上の發音の便宜に依つて、他の音に轉ずるも

い音便

のを動詞の音便といふ。左の四種がある。

- 一 い音便 「開きて」の「開いて」と、「次ぎて」の「次いで」となつたやうに、四段活用の語の「きぎのい」に轉じたものを動詞のい音便といふ。

う音便

- 二 う音便 「問ひて」の「問うて」と、「思ひて」の「思うて」となつたやうに、四段活用の語の「ひのう」に轉じたものを動詞のう音便といふ。

撥音便

- 三 撥音便 「飛びて」の「飛んで」と、「勇みて」の「勇んで」と、「死にて」の「死んで」となつたやうに、四段活用の行變格活用の語の「びみにのん」に轉じたものを動詞の撥音便といふ。

促音便

- 四 促音便 「行きて」の「行つて」と、「立ちて」の「立つて」と、「舞ひて」の「舞つて」と、「乗りて」の「乗つて」となつたやうに、四段活用の語の「き

練習

ちひりのつに轉じたものを動詞の促音便といふ。

練習 一 左の文中の音便語を指摘し、その原音を言へ。

- (一) 兄は彼の處に往つて留り、弟は彼の處を去つて還る。
- (二) 競走に勝つて後に、その經過を言うて笑うたり。
- (三) 太郎は舟を漕いだり、水に泳いだりしてゐた。
- (四) この仕事が進んでからは、次の事に取掛つてもよい。
- (五) あの木の枝に止つて居た鳥が、いつの間にか飛んで行つた。

二 左の文中の誤を正し、その理由を言へ。

- (一) 行を慎むでかゝる過を再びすまじと誓ふたり。
- (二) 淵に臨むで魚を羨むは、退ひて網を結ぶに如かず。
- (三) 氣の合ふた者四五人位で行こうじやないか。
- (四) 苦しひことを堪へ忍むで、事に當らうと思ふ。
- (五) 疑を抱ひては常に教を師に請ふてあつた。

第七節 動詞語尾の假名遣

動詞の「習ひ」「報い」「率ゐ」と、又「強ふ」「植う」と、又「整へ」「消え」「飢ゑ」との如きは、各語尾の發音は同じでも活用が違ふから、各假名遣に特殊の用法がある。此等を正しく書き表すことを動詞語尾の假名遣といふ。その用法を知るには、左の三法に據るが宜しい。

一 動詞活用の辨別 「思は」「はは行四段に活用し」「出さ」「はさ行四段に活用するから」「思わ」「出ださ」の誤が知られる。

二 動詞の語根 「養ふ」の語根は「やしなで」「支ふ」の語根は「ささで」あるから、「やし」のふ、「さそふ」の語の誤が知られる。

三 動詞活用の誤り易い語 「閉ぢ」「閉ず」の誤を、又「榮ゆ」「はや行下二段活用の語であるから」「榮へ」「榮ふ」の誤を知られるやうに、動詞活用の誤

動詞活用の誤り
易い語

動詞の語根

動詞活用の辨別

動詞語尾の假名
遣

誤り易い動詞活用の用例

り易い語を特に注意して、記憶し置くが肝要である。左に動詞語尾の假名遣の誤り易いものの重なる用例を挙げる。

四段活用

は行四段 商ふ 敬ふ 逆ふ 漂ふ 集ふ 賄ふ 紛ふ

上二段活用

た行上二段 落つ 怖づ 朽つ 閉づ 綴づ 恥づ 攀づ

は行上二段 生ふ 強ふ 誣ふ 忍ぶ 綻ぶ 用ふ 詫ぶ

や行上二段 老ゆ 悔ゆ 報ゆ

下二段活用

さ行下二段 失す 仰す 着す 似す 馳す 交す 瘦す 寄す

た行下二段 出づ 企つ 捨つ 立つ 撫づ 秀づ 詣づ 愛づ

や行下二段 癒ゆ 覺ゆ 開ゆ 消ゆ 肥ゆ 越ゆ 凍ゆ 牙ゆ

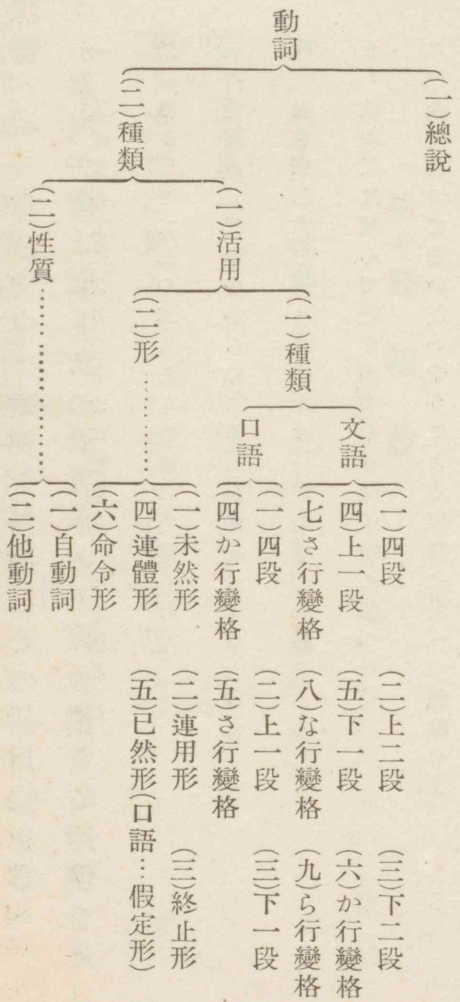
總括

以上の動詞の事項を總括すれば左表の通りである。

第八節 動詞の總括

わ行下二段	植う	餓う	据う	榮ゆ	聳ゆ	絶ゆ	費ゆ	煮ゆ	生ゆ	映ゆ	冷ゆ
	吠ゆ	吼ゆ	殖ゆ	見ゆ	燃ゆ	萌ゆ					

動詞一覽表



練習

練習

一 左の文中の動詞を指摘し、その活用法を言へ。

- (一) 人は交る友によりて、善きにも悪しきにも移る。
 - (二) 思ひ出でてしのぶ人あらむ程こそ樂しけれ。
 - (三) 愛敬ありて語多からぬこそあかず向はまほしけれ。
 - (四) 過ぎ來し方を顧みれば、たゞ一夜の夢の心地せらるれ。
 - (五) 彼の父は嘔んで吐き出すやうに丁寧に語つた。
 - (六) 後になつて悔いないやうに、よく困難に堪へて勉勵せよ。
 - (七) 岩の上から落ち下る瀧の水は下に小さな流をなしてゐる。
- 二 左の文中に誤あらばこれを正せ。
- (一) 月影澄むで鐘の音もさへて聞へたり。
 - (二) 今は宿痾も癒へて、多年の苦痛も消え失したり。
 - (三) 我が國民たるものは誓ふて君國に報ふべし。

- (四) 恥じてよく改ため、覺えては常に忘れない人がよい。
- (五) 彼は負ふた子に教えられて淺瀬を渡つた。
- (六) 山を攀じ溪を越へて、進むこと十軒餘であつた。
- (七) 松葉が一面に浮むで、水を蔽ふてゐるから、池があるやうに見へない。

第五章 形容詞

第一節 總説

- (一) 彼の志は善し。 悪しき行を戒めよ。
- (二) 山高し。 廣き海を見よ。
- (三) 旅行は樂し。 苦しき事に堪ふ。

右の文例で、善し、悪しきは性質を表し、高し、廣きは状態を表し、樂し、苦しきは感情の状態を表してゐる。

形容詞

定義 事物の性質又は状態を表す語を形容詞といふ。

第二節 文語形容詞の活用

く (未然形) 山高くば眺望よからむ。

く (連用形) 山高く聳ゆ。

高し (終止形) 山高し。

き (連體形) 山高きなり。

けれ (已然形) 山高ければ眺望よし。

右の如く、形容詞も動詞の如く、その語尾の變化する部分と、變化せぬ部分より成つてゐる。その變化せぬ部分を語根又は語幹といひ、變化する部分を語尾といひ、その變化する作用を形容詞の活用といひ、又形容詞のはたらきともいふ。

第三節 文語形容詞の活用形

語根 語幹
語尾
形容詞の活用
形容詞のはたらき

形容詞は動詞に類して、五種の活用形を有してゐるが、唯命令形のないことは特殊である。これを左の二種に分けることが出来る。

一 く活用 高く高し高き高けれの如く、語尾のくしきけれと活用するものをく活用といふ。

二 しく活用 楽しく樂し樂しき樂しけれの如く、語尾のしくしきしけれと活用するものをしく活用といふ。

第四節 口語形容詞の活用形

口語の形容詞は文語の形容詞と似寄つてはゐるが、口語では現今未然形を用ひない。又終止形と連體形とが同形で、文語の已然形をば、口語では假定形と名づけて假定の意を表してゐる。今文語及び口語の形容詞を表にすれば左の通りである。

口語の形容詞

しく活用

く活用

形容詞活用表

種	類	語	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形(文) 假定形(口)
文	く活用	高	く	く	し	き	けれ
語	しく活用	樂	しく	しく	し	き	しけれ
口	く活用	高	○	く	い	い	けれ
語	しく活用	樂	○	しく	し	い	しけれ

第五節 形容詞の音便

形容詞も動詞の如く、發音の便宜より生じた、左の二種の音便の語がある。

- 一 い音便 「善き日」の「善い日」と、「樂しき事」の「樂しい事」となつたやうに、「きのい」に轉じたものを形容詞のい音便といふ。
- 二 う音便 「高くなる」の「高うなる」と、「宜しく」の「宜しう」となつたやうに、「くのう」に轉じたものを形容詞のう音便といふ。

い音便

う音便

練習

練習

又「使命を全くす」の「使命を全うす」と、「君命を辱くす」の「君命を辱らす」となつたやうに、形容詞の連用形よりさ行變格の「す」と合して動詞となつたものも、このう音便に類似してゐる。

練習 一 左の文中の音便語を指摘せよ。

- (一) 山高うして清い水もその麓に流る。
 - (二) 白い花赤い花、いづれも美しく見えたり。
 - (三) 善いかな、かの人の任務を重んずることや。
 - (四) 辛うじて問題を解き得たが、面白う感じた。
 - (五) ひもじい時には、まづいものがない。
- 二 左の文中の誤を正し、その理由を言へ。
- (一) 樂しひこともあれば、悲しむこともあり。
 - (二) 御懇教を辱ふせられ、小生の使命を全ふし候。
 - (三) このやうに早ふ逢ふては、嬉しひこと限ない。

形容動詞

形容動詞は何れも動詞の一部類である。

- (四) わるゐことは、せぬがよろしふござゐます。
- (五) よおこそお出で下さゐまして、ありがとふ存じます。

第六節 形容動詞

形容動詞 「高くあら」「高くあり」の「高から」「高かり」となり、「正しくあら」「正しくあり」の「正しから」「正しかり」となるやうに、形容詞の連用形は「あり」の活用語と連結して「ら行變格活用」となる。又「高く」「正しく」より「せし」に連結して、「高くせ」「高くし」「正しくせ」「正しくし」となるやうに、形容詞の連用形より「す」の活用語と連結して、「さ行變格活用」となるものを**形容動詞**といふ。左の通りである。

ら行變格活用	高くあら	高くあり	高くある	高くあれ
	正しくあら	正しくあり	正しくある	正しくあれ
さ行變格活用	高くせ	高くし	高くす	高くすれ
	正しくせ	正しくし	正しくす	正しくすれ

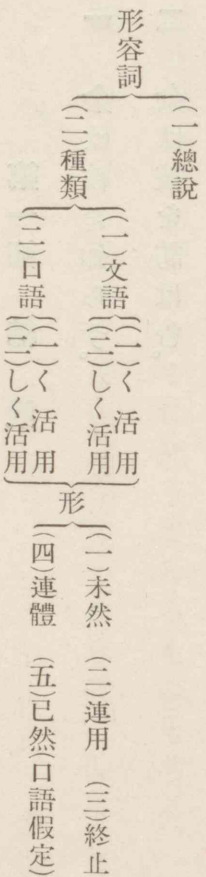
總括

形容詞一覽表

練習

第七節 形容詞の總括

以上の形容詞の事項を總括すれば左表の通りである。



練習 一 左の文中の形容詞を指摘し、その活用形を言へ。

- (一) この物は古くして、美しくはなけれども品質は宜し。
- (二) 心正しく才賢き人を親しき友とせよ。
- (三) 今は寒からず暑からず、最も好き季節なり。
- (四) こゝは山には遠いが、海には近く、新しい魚が多い。
- (五) あの人は家貧しいけれども、奉公の念の篤い人である。

二 左の文中の誤を正し、その理由をも言へ。

- (一) 人を嘲けり笑ふて喜ぶは甚だ悪しし。
- (二) 松青く砂白ふして、家もその間に見へて眺いと珍しし。
- (三) 貴下の御來臨を辱ふし、感謝の至に堪えず候。
- (四) 首尾よふ合格したから嬉しひこと限ない。
- (五) 久しふ歩むたが、苦しふも思わなかつた。

第六章 助動詞

第一節 總説

- 一 余は彼を知らず。
- 二 余は彼を訪はむ。
- 三 余は彼に逢ひたり。

右の例でずは打消むは未來たりは完了の意を表してゐるが、何

助動詞

れも動詞の下に添うて、その意義を助けてゐるものである。但し助動詞は多くは動詞の下に添うてゐるが、その中或は名詞・代名詞或は他の助動詞の下に添うてゐるものもある。
定義 主として動詞の下に添うて、その意義を助ける語を助動詞といふ。

第二節 文語助動詞の種類

文語助動詞は意義に因り、左の十二種に分類することが出来る。

- (一) 受身
- (二) 可能
- (三) 自發
- (四) 使役
- 文語助動詞 (五) 尊敬
- (六) 時
- (七) 推量
- (八) 指定
- (九) 詠歎
- (一〇) 打消
- (一一) 希望
- (一二) 比喩

助動詞も亦動詞・形容詞に類似して活用し、又特殊に活用するなど、それ／＼その活用形がある。以下順次に説明する。

助動詞の活用形

受身の助動詞

一 受身の助動詞

- 一 彼は他人より恵まる。
- 二 少年長者より教へらる。

右のるらるは或者が他の者より動作を受ける意を表すもので、此等を受身の助動詞といふ。次の通りに活用する。

本形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
る	れ	れ	る	るゝ	るれ	れよ
らる	られ	られ	らる	らるゝ	らるれ	られよ

以上のるは四段活用な變活用ら變活用の未然形に、らるはその他の動詞の未然形に續く。

二 可能の助動詞

- 一 余は一日にてこの書を読まる。

接續

可能の助動詞

- 二 かゝる問には誰にも答へらる。
 - 三 彼の力千引の岩をも碎くべし。
 - 四 彼の勢は何人にても當るべからず。
- 右のるらるべしべからはその動作を能く成し得る意を表すもので、此等が可能の助動詞といふ。次の通りに活用する。

本形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
る	れ	れ	る	るゝ	るれ	○
らる	られ	られ	らる	らるゝ	らるれ	○
べし	べく	べく	べし	べき	べけれ	○
べかり	べから	べかり	(べかり)	(べかる)	(べかれ)	○

括弧内のものは現代文では殆ど用ひられない。

以上のるらるの接續法は、前項の受身の助動詞に同じく、べしべ

接續

かりの接續法は動詞の終止形に續く。但しべしべかりはら變活用よりのみは動詞の連體形に續く。

三 自發の助動詞

- 一 常に父母の事のみ思はる。
- 二 昔の事ども思ひ出でらる。

右のるらるはその動作が自然に發して止め難い意を表すもので、此等を自發の助動詞といふ。その活用及び接續法は前項の可能の助動詞のるらるに同じである。

自發の助動詞

接續

四 使役の助動詞

- 一 父はその子に文を作らす。
- 二 母はその子に早く起きさす。
- 三 師は生徒に教訓を守らしむ。

使役の助動詞

右のすさすしむは或者が他の者に動作を行はせる意を表すもので、此等を使役の助動詞といふ。次の通りに活用する。

本形	す	さす	しむ
未然形	せ	させ	しめ
連用形	せ	させ	しめ
終止形	す	さす	しむ
連體形	する	さする	しむる
已然形	すれ	さすれ	しむれ
命令形	せよ	させよ	しめよ

以上のすは四段活用の變活用上ら變活用の未然形に、さすはその他の動詞の未然形に、しむはすべての動詞の未然形に續く。

五 尊敬の助動詞

- 一 父は讀書を好まる。
- 二 師は我等を誠めらる。
- 三 主上は上奏を聞かせ給ふ。

接續

尊敬の助動詞

四 主上宮中より出でさせ給ふ。
 五 主上は式場に臨ましめ給へり。
 右の「るらるせさせしめ」は他人の動作を尊敬する意を表すもので、此等を尊敬の助動詞といふ。前項の受身使役の助動詞のそれぞれのもので、大體は同語形に活用する。

附説

「聞かせ給ふ」「新年を賀し奉る」「今日來ます君を待つ」「書を讀み侍りの語中の給ふ奉るます侍りの如きは敬意の動詞より轉來したもので、此等もこの種の尊敬の助動詞である。

以上の「るらるせさせしめ」は前項の受身使役の助動詞のそれぞれのものと同語形に續く。

六 時の助動詞

(一) 完了の助動詞

- 一 風は花を散しつ。
- 二 今日風も止みぬ。
- 三 程なく風止みたり。
- 四 今は風も止めり。

右の「つぬたりり」は動作の今方に完了した意を表すもので、此等を時の完了の助動詞といふ。次の通りに活用する。

本形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
つ	て	て	つ	つる	つれ	てよ
ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	○
り	(ら)	(り)	り	る	(れ)	○

以上の「つぬたりり」は何れも動詞の連用形に「り」は四段活用の已然

時の完了の助動詞

接續

形と、き變活用の未然形とに續く。但しぬはな變活用には續かない。

(二) 過去の助動詞

- 一 昨日文を作りき。
- 二 先日友を招きけり。

右のきけりは動作の既に過ぎ去つた意を表すもので、此等を時の過去の助動詞といふ。次の通りに活用する。

本形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
き	○	○	き	し	しか	○
けり	(けら)	(けり)	けり	ける	けれ	○

以上のきけりは何れも動詞の連用形に續く。但しきししかはか變活用では未然形及び連用形にししかと續き、きには續かぬ。

接續

時の過去の助動詞

又き變活用では未然形にししかと續き、連用形にきと續くこと左表の通りである。

活用	本形	未然形	連用形
カ變活用	來 _く	來 _こ し _し か	來 _き し _し か
サ變活用	爲 _す	爲 _せ し _し か	爲 _し ○ _き

(三) 未來の助動詞

- 一 明日は雨降らむ。

右のむは動作の未來に起る意を表すもので、これを時の未來の助動詞といふ。次の通りに活用する。

本形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
む	○	○	む	む	め	○

以上のむは動詞の未然形に續く。

接續

時の未來の助動詞

練習

練習

左の文中の時の助動詞を指摘し、その種類を言へ。

- (一) 散りたる花は雪の如く積りぬ。
- (二) 民富み國榮えしかば、天下平らかに治りき。
- (三) 實朝も失せてければ、政權は北條氏に移りたりき。
- (四) 研究の志ありたれど、水泡に歸せりと歎かれたり。
- (五) 潮みちぬ。追風も吹きぬべしといへば、舟に乗りぬ。

七 推量の助動詞

- 一 近日菊の花開かむ。
- 二 人皆嬉しと觀るらむ。
- 三 種々の花も咲きなむ。
- 四 白菊の花も咲きけむ。
- 五 近日菊の花咲くべし。
- 六 山には時雨降らまし。

推量の助動詞

- 七 人皆樂しと言ふらし。
- 八 紅葉亂れて流るめり。

右のむらむなむけむなむらむむ未然形連用形終止形連體形已然形命令形
表すもので、此等を推量の助動詞といふ。次の通りに活用する。

本形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
む	○	○	む	む	め	○
らむ	○	○	らむ	らむ	らめ	○
なむ	○	○	なむ	なむ	なめ	○
けむ	○	○	けむ	けむ	けめ	○
べし	○	○	べし	べき	べけれ	○
まし	○	○	まし	まし	ましか	○
らし	○	○	らし	らし	らし	○
めり	○	○	めり	める	めれ	○

接續

以上のむましは動詞・助動詞の未然形に、なむけむは連用形に、らむべしらしめりは終止形に續く。但しらむべしらしめりはら變活用よりは連體形に續く。

附説 べしは本來推量の意であるが、通常左の如き意に用ひられてゐる。

- (一) 風起らば後には雨止むべし。 (推量)
- (二) 三尺の秋水鐵をも斷つべし。 (可能)
- (三) 油盡くれば燈火は消ゆべし。 (當然)
- (四) 我も朝は必ず早く起くべし。 (決意)
- (五) 定刻より講堂に參集すべし。 (命令)

八 指定の助動詞

- 一 今咲けるは梅の花なり。

指定の助動詞

- 二 鶯已に春を告ぐるなり。
 - 三 此の書甚だ宜しきなり。
 - 四 君は君たり臣は臣たり。
- 右のなりたりは何れも事物を指し定める意を表すもので、此等を指定の助動詞といふ。次の通りに活用する。

本形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
なり	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ

以上のなりは體言及び動詞・形容詞の連體形に續き、たりは體言のみに續く。

九 詠歎の助動詞

- 一 鶯も出でて春を告ぐなり。

接續

詠歎の助動詞

二 流れて早き月日なりけり。
右のなりけりは詠歎の意を表すもので、此等を詠歎の助動詞といふ。次の通りに活用する。

本形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
なり	○	○	なり	なる	なれ	○
けり	○	○	けり	ける	けれ	○

接續

以上のなりは指定の助動詞のなりと異なつて、動詞の終止形に續き、又けりは過去の意の助動詞のけりと同じく、動詞の連用形に續く。

一〇 打消の助動詞

- 一 彼は學問を怠らず。
- 二 彼は常に缺席せざりき。

打消の助動詞
否定の助動詞

三 未だ遠くは行かじ。
四 心配するに及ぶまじ。
右の^レざりじまじは打消の意を表すもので、此等を打消の助動詞といひ、又否定の助動詞ともいふ。次の通りに活用する。

本形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ず	ず	ず	ず	ぬ	ね	○
ざり	ざら	ざり	(ざり)	ざる	ざれ	ざれ
じ	○	○	じ	じ	じ	○
まじ	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	○

接續

以上の^レざりじは動詞の未然形に、まじは終止形に續く。但しまじはら變活用よりは連體形に續く。

一一 希望の助動詞

希望の助動詞

- 一 良き友に交りたし。
- 二 かの良書を見まほし。
- 三 この書を讀まなむ。

右のたしまほしなむは希望の意を表すもので、此等を希望の助動詞といふ。次の通りに活用する。

本形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
たし	たく	たく	たし	たき	たけれ	○
まほし	まほしく	まほしく	まほし	まほしき	まほしけれ	○
なむ	○	○	なむ	○	○	○

以上のたしは動詞の連用形に、まほしなむは未然形に續く。このなむは推量の意のなむと同語形であるが、接續法が違ふ。

一二 比喩の助動詞

接續

比喩の助動詞

- 一 落花は雪の降るごとし。
 - 二 落花は雪の降るがごとし。 色は雪の白きがごとし。
 - 三 過ぐる光陰は矢のごとし。
- 右のごとしは事物を比喩する意を表すもので、これを比喩の助動詞といふ。次の通りに活用する。

本形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ごとし	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき	○	○

以上のごとしは動詞の連體形に續き、又動詞・形容詞の連體形の下に助詞がを挟み、又名詞の下に助詞のを挟んで續く。

練習 左の文中の助動詞を指摘して、その種類を言へ。

- (一) 助けらるゝものならば助けたきものなり。
- (二) おのが成すべき務は決して怠るべからず。

接續 練習

口語の助動詞

- (三) 彼が口惜しく思ひぬるもことわりならずや。
- (四) 明日は晴れなむとぞいふなる。さもあらなむと念じをりぬ。
- (五) 歩まば歩まれしを、人に勧められて、已むを得ず車に乗れり。

第三節 口語助動詞の種類

口語助動詞は意義に因り、左の十一種に分類することが出来る。

- (一) 受身
- (二) 可能
- (三) 自發
- (四) 使役
- (五) 尊敬
- (六) 時
- (七) 推量
- (八) 指定
- (九) 打消
- (一〇) 希望
- (一一) 比喩

一 口語受身の助動詞

- 一 名譽が人に知られる。
- 二 生徒が師に教へられる。

右のれるられるは受身の意を表す助動詞である。その活用は次の通りである。

口語受身の助動詞

本形	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
れる	れ	れ	れる	れる	れ、	れよ(ろ)
られる	られ	られ	られる	られる	られ、	られよ(ろ)

接續

動詞に接續する方法は、前節の文語の助動詞に準じて類推することが出来る。以下皆類推せよ。

二 口語可能の助動詞

- 一 一日に一冊の書を読まれる。
- 二 この問は何人にも答へられる。

右のれるられるは可能の意を表す助動詞である。その活用は受身の助動詞と同じであるが、唯命令形はない。

三 口語自發の助動詞

- 一 將來の事が思ひやられる。

口語可能の助動詞

口語自發の助動詞

二 あの人の行末が案じられる。
右のれるられるは自發の意を表す助動詞である。その活用は受身の助動詞と同じであるが、唯命令形はない。

四 口語使役の助動詞

- 一 父が子に字を習はせる。
- 二 母が子に早く起きさせる。

右のせるさせるは使役の意を表す助動詞である。

口語使役の助動詞

本形	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ(る)
させる	させ	させ	させる	させる	させれ	させよ(る)

五 尊敬の助動詞

- 一 父は喜んで語られる。

口語尊敬の助動詞

二 師は丁寧に教へられる。
三 私も喜んで居ります。
右のれるられるますは尊敬の意を表す助動詞である。れるとられるとの活用は、受身の助動詞と同じであるが、唯命令形はない。ますの活用の次の通りである。

本形	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
ます	ませ	まし	ます(まする)	ます(まする)	ますれ	まし(し)

六 口語時の助動詞

- 一 今日(けふ)は空(そら)が晴(は)れた。 完了の助動詞。
- 二 昨日(けふ)は雨(あめ)が降(ふ)つた。 過去の助動詞。
- 三 明日(あした)は雨(あめ)が降(ふ)らう。 未來の助動詞。
- 四 今夜(こんや)は月見(つきみ)をしよう。 未來の助動詞。

口語完了の助動詞
口語過去の助動詞
口語未來の助動詞

右の初のたは時の完了、次のたは時の過去、うは時の未來の意を表す助動詞であるが、文語の助動詞よりもその数が少い。

種類	本形	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
未來	う	○	○	う	う	○	○
過去	た	○	○	たり	た	○	○
完了	た	○	○	たり	た	○	○

七 口語推量の助動詞

- 一 彼も間もなく行かう。
 - 二 彼は喜んで承知しよう。
 - 三 間もなく彼も來るらしい。
- 右のうようらしいは推量の意を表す助動詞である。

口語推量の助動詞

口語指定の助動詞

本形	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
う	○	○	う	う	○	○
よう	○	○	よう	よう	○	○
らしい	○	○	らしい	らしい	○	○

八 口語指定の助動詞

- 一 楠木正成は忠義の臣だ。
 - 二 楠木正行も忠義の臣です。
- 右のだですは指定の意を表す助動詞である。但しですはだよりも丁寧の意を表す語である。

本形	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
だ	○	○	だ	だ	○	○
です	○	○	です	です	○	○

九 口語打消の助動詞

- 一 今日は風が吹かぬ。
- 二 今日風が吹かない。
- 三 明日は風が吹くまい。

右のぬないまいは打消(否定)の意を表す助動詞である。ぬはんとも發音し、從つてんとも書く。

口語打消の助動詞

ぬ	ない	まい
○	○	○
す	なく	○
ぬ(ん)	ない	まい
ぬ(ん)	ない	まい
ね	なければ	○
○	○	○

一〇 口語希望の助動詞

- 一 早く目的を果したい。御承知下されたい。

口語希望の助動詞

たい	○	たく	たい	たい	たけれ	○
本形	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形

右のたいは希望の意を表す助動詞である。

一一 口語比喩の助動詞

- 一 散る花は雪のやうだ。

口語比喩の助動詞

右のやうだは比喩の意を表す助動詞である。

やうだ	やうだら	やうだつ	やうだ	やうな	○	○
本形	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形

練習 左の文中の口語助動詞を指摘し、その種類を言へ。

- (一) 山の上からは市街がよく見られよう。
- (二) 花を咲かせるも雨で、散らすも亦雨ではないか。
- (三) 今日は白い花が咲いたが、明日は赤いのが開かう。

練習

助動詞相互の接續

- (四) 雨が止んだら散歩に出掛けようと思つてゐる所だ。
- (五) 朝の一番列車で立ちたいから、早く起きなければならぬ。

第四節 助動詞相互の接續

助動詞は前記の如く、主として動詞・形容詞に接續するものであるが、又他の助動詞に相互に接續するものも多い。

一 彼は善き教訓を父より守らしめられしなり。
未然形に續く 連用形に續く 連體形に續く

二 かの良法は父より教へられたるなるべし。
未然形に續く 連用形に續く 連體形に續く

右のしめられしなり又られたるなるべしは助動詞の相互に接續したるものであるが、これが數語接續しても、その固有の意義を失はないのである。

助動詞相互の接續法も、すべて動詞・形容詞に接續する方法に準

接續

總括

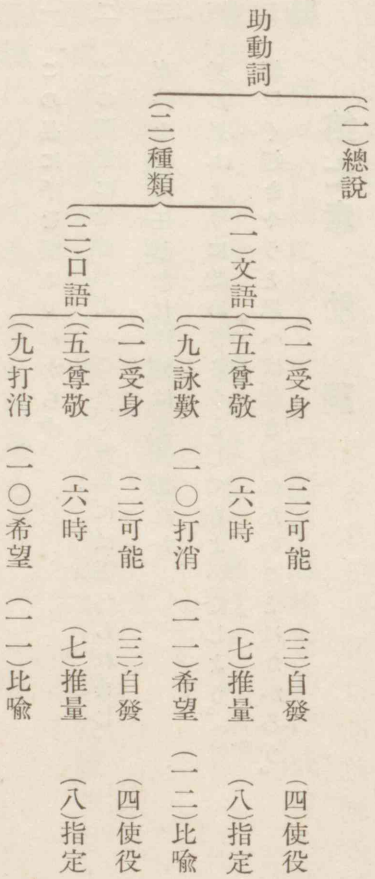
助動詞一覽表

練習

じて、これを類推することが出来る。

第五節 助動詞の總括

以上の助動詞の事項を總括すれば左表の通りである。



練習 一 左の文中の助動詞を指摘し、その種類の名を言へ。

- (一) 吾人は義勇公に奉ぜざるべからず。
- (二) 懈らずして學を勉めば、いかでか古人に及ばざるべき。

- (三) 我も行きなむ。今日行かずば行かるゝ日もあらざるべし。
- (四) 極めて自由な氣分に充ちた世界のやうに思はれた。
- (五) 雨が止んだから散歩に出掛けようと思つてゐる所である。

二 左の文中に誤あらばこれを正せ。

- (一) この品に手を觸るゝべからず。
- (二) この問題には彼が考ふごとく、容易には答へられまじ。
- (三) 事件を彼に任したれば彼は解決されむ。
- (四) 君の思ふやうに改めささうとしてもよいでしょう。
- (五) 朝早く起きやうと思へば起きられないことはなかるう。

第七章 助詞

第一節 總説

- 一 われは君が代のさかえを祈る。
- 二 強い風吹かば花も忽ち散らむ。

助詞
てにをは

三 言ふは易けれども行ふは難し。

右の文例中のはがのをばもははは何れもそれゝの品詞の下に添うて、その語の意味を助け、或はそれに特殊の意味を添へる語である。

定義 種々の語に添うて、その語の意味を助け、或はそれに特殊の意味を添へる語を助詞又はてにをはといふ。

第二節 助詞の種類

助詞はその數甚だ多くあるが、その添ふ品詞の種類によつて、次の三種に分類することが出来る。

第一類 名詞・數詞・代名詞に添ふ助詞

- 一 日の出づる頃。 高き山に登る。
- 二 一を知るのみ。 第一等の人物。

名詞・數詞・代名詞に添ふ助詞

三 吾が親しき友。よく彼と語る。

右の語中ののには名詞に、をのは數詞に、がとは代名詞に添うてゐる。この種類の重なる助詞は左の通りである。

(一)が 君が代。梅が枝。所有の意を表した。

天が下。佐渡が島。接續の意を表した。

(二)が(口語) 鶯が鳴く。旭が照る。主體を表した。

(三)の 父の書。友人の家。所有の意を表した。

世の中。富士の山。接續の意を表した。

花の咲く園。秋風の吹く頃。主體を表した。

花の都。夢の世。比喻を表した。

(四)つ 天つ神。沖つ白波。接續の意を表した。

(五)を 山を望む。花を惜む。動作の目的物を表した。

に

山を越ゆ。鳥空を飛ぶ。動作の場所を表した。

故國を去る。鼠穴を出づ。動作の起點を表した。

(六)に 山に登る。書を机に載す。場所を表した。

教に従ふ。この一戦にあり。標準を表した。

月に叢雲。花に風。添加の意を表した。

兄に劣らず。金は銀に優る。比較の意を表した。

(七)へ 前へ進め。都へ上る。方向を表した。

(八)と 花と月と雪とを眺むるに宜し。竝列を表した。

雪と散る。雨と飛ぶ。比喻の意を表した。

幼名を牛若丸といへり。指定の意を表した。

友人と月を見る。父と行く。共同の意を表した。

終日雨降りと降る。繼續の意を表した。

へ

(八)と

(七)へ

(六)に

より

甲と乙とは相等し。

比較の意を表した。

(九)より

歐洲より歸る。

起點を表した。

紅葉は花より紅なり。

比較の意を表した。

から

(一〇)から(口語)米國から歸つた。

起點を表した。

まで

(二)まで 山頂まで登る。米國まで行く。

到着點を表した。

にて

(三)にて 學校にて學ぶ。東京にて生る。

場所を表した。

雨にて濡る。 風にて倒る。

原因を表した。

筆にて書けり。 汽車にて行く。

方便を表した。

(三)で(口語)

墨で書く。 徒歩で行く。

右に同じ。

練習

練習 次の文中の助詞を指摘せよ。

(一) 父母の恩は山より高く海より深し。

(二) 左へ折れ右に曲り、社の前まで行け。

(三) 幾とせこゝに鍛へたる鐵より堅き腕あり。

(四) 何時の間にか柿の實が木から落ちた。

(五) 昨日の温度は三十度まで上つてあつた。

第二類 動詞・形容詞助動詞に添ふ助詞

一 櫻の花咲かば見に行かむ。

二 花美しけれども未だ見ず。

三 梅咲きたるに鶯來て鳴かず。

右の語中のばは動詞に、どもは形容詞に、には助動詞に添うてゐる。この種類の重なる助詞は左の通りである。

(一)ば 風吹かば波立たむ。

假定の原因の意を表した。

(二)ば(口語) 風吹けば波が立たう。

右に同じ。

(三)たら(口語) 雨が降つたら行くまい。

右に同じ。

動詞・形容詞・助動詞に添ふ助詞

ば

ば

たら

ば、から、ので、と、とも、ても、ど、ども、けれども、に

- (四) ば 風吹けば波立つ。
確定の原因の意を表した。
- (五) から(口語) 風吹くから波が立つ。
右に同じ。
- (六) ので(口語) 天氣が好いので出掛けた。
右に同じ。
- (七) と 繪に書くと筆も及ばじ。
假定の反対の意を表した。
- (八) とも 年老いて悔ゆとも及ばじ。
右に同じ。
- (九) ても(口語) 今から行つても間に合ふまい。
右に同じ。
- (一〇) ど 聲聞ゆれど姿は見えず。
確定の反対の意を表した。
- (一一) ども 天氣晴朗なれども波高し。
右に同じ。
- (一二) けれども(口語) 見ただけれども見えなかつた。
右に同じ。
- (一三) けれども(口語) 呼んだけれども聞えなかつた。
右に同じ。
- (一四) に 花あらむと思ふに|入りて見る。
原因の意を表した。
- 梅の花咲けるに|驚來て啼かず。
反対の意を表した。

を、が、が、の、て、で

- (一五) を 花おもしろきに霞もかゝれり。
添加の意を表した。
- 友より語らるゝを|我も語りぬ。
接續を表した。
- 今日は寒きを|埋火かきおこす。
原因の意を表した。
- 堪へがたきを|遂に成したり。
反対の意を表した。
- かくならむとは|思はざりしを|
感歎の意を表した。
- (一六) が 我も急きしが|遂に及ばざりき。
反対の意を表した。
- 花見に行きしが|満開なりき。
接續の意を表した。
- 行つたが|逢はなかつた。
反対の意を表した。
- (一七) が(口語) 雨が降るのに|傘を持たない。
右に同じ。
- (一八) のに(口語) 梅の花散りて|櫻の花咲きたり。
推移の意を表した。
- (一九) て それとも知らで|見たり。
逆接の意を表した。
- (二〇) で 話もしないで|歸つた。
右に同じ。

つゝ

(三) つゝ

語りつゝ笑ふ。

重複の意を表した。

常に行きつゝ教を受く。

反覆の意を表した。

親に愛せられつゝ生ひ立ちぬ。

繼續の意を表した。

墨をすりつゝ冊子に書きぬ。

經過の意を表した。

ながら

(三) ながら

瀧の音を聞きながら歌ふ。

重複の意を表した。

不利と知りながら履行す。

繼續の意を表した。

な

(三) な

それを言ふな。これを讀むな。

禁止の意を表した。

ばや

(三) ばや

今宵はこゝに宿を借らばや。

希望の意を表した。

ね

(三) ね

早く行きね。こゝをば去りね。

命令の意を表した。

練習

左の文中の助詞を指摘せよ。

(一) 明日天氣よくば遠足せむ。

(二) 天氣晴朗なれども波立つこと高し。

種々の品詞に添ふ助詞

は

(一) は

柳は緑に、花は紅なり。

差別の意を表した。

昨日風荒々しく吹きたるは。

感歎の意を表した。

ば

(二) ば

湯をば飲めども、水をば飲まず。

差別の意を表した。

- (三) 日は暮れかゝるに、宿るべき所は未だ遠し。
- (四) それを知りながら、改めないことはよくない。
- (五) 私より手紙を送つたが、まだその返事は來ない。

第三類 種々の品詞に添ふ助詞

一 柳の葉は緑なり。それは美しき色なり。

二 口に言ふは易し。善きは取り悪しきは捨てよ。

三 彼の行きたるは今日なり。彼には同行せず。

右のはは名詞・代名詞・動詞・形容詞・助動詞・助詞など、種々の品詞に添うてゐる。この種類の重なる助詞は左の通りである。

も	(三)も	白金も黄金も玉も何かせむ。	並列の意を表した。
ぞ	(四)ぞ	思ひもよらず。圖らずも友に逢ふ。 あまの小舟のつなてかなしも。 今日花をぞ眺むる。 幼くとも武士の子なるぞ。	強意を表した。 感歎の意を表した。 強い指示の意を表した。 感歎の意を表した。
なむ	(五)なむ	これなむ都鳥といふ。	指示の意を表した。
や	(六)や	ありやなしや。 見よや聞けやといへり。	疑問の意を表した。 感歎の意を表した。
やは	(七)やは	空しく月日をや過すべき。 底ひなき淵やはさわぐ。 霞か雲かはた雪か。	反対の意を表した。 右に同じ。 疑問の意を表した。
か	(八)か	世の中は何か常なる。	反対の意を表した。

かは	(九)かは	世のさまにも似たるか。 一年に二度とだに來べき春かは。	感歎の意を表した。 反対の意を表した。
こそ	(一〇)こそ	今日花をこそ眺むれ。	強い指示の意を表した。
し	(一一)し	書をし讀めり。必ずしも然らず。	強意を表した。
だに	(一二)だに	その一つだに覺えず。	類推させる意を表した。
でも	(一三)でも(口語)	その一つでも知らない。	右に同じ。
すら	(一四)すら	禽獸すら禮を知る。	右に同じ。
さへ	(一五)さへ	今日は晴れて日さへ輝く。	添加の意を表した。
まで	(一六)さへ(口語)	今日は快い風さへ吹く。	右に同じ。
のみ	(一七)まで(口語)	今夜は月まで輝いてゐる。	右に同じ。
ばかり	(一八)のみ	この事のみを思ふ。	限定の意を表した。
	(一九)ばかり	この書ばかりを讀む。	右に同じ。

ばかり だけ よ な なこそ かな が がな かも かし

- (一) 五日間ばかり旅行せり。
分量の意を表した。
- (二) ばかり(口語)今こゝに五人ばかり来た。
右に同じ。
- (三) だけ(口語) 今こゝから十人だけ行つた。
右に同じ。
- (三) よ この武者ぶりの勇しさよ。
感歎の意を表した。
- (三) な その事をば言ふな。
禁止の意を表した。
- (四) なこそ あるじなしとて春なわすれそ。
右に同じ。
- (五) かな 年月の射るが如くもおもほゆるかな
感歎の意を表した。
- (六) が 甲斐が嶺をさやにも見しが。
希望の意を表した。
- (七) がな 彼の人の来るよしもがな。
右に同じ。
- (八) かも 三笠の山に出でし月かも。
感歎の意を表した。
- (九) かし 尊き神の恵なりかし。
強意を表した。

練習 左の文中の助詞を指摘せよ。

總括

助詞一覽表

練習

以上の助詞の事項を總括すれば左表の通りである。

第三節 助詞の總括

- (一) 思ひきや、げふ君に別れむとは。
常に良からぬ書をな讀み給ひそ。
- (二) たとひ人には知られずとも、おのが心に恥ぢざるべき。
よく勉強さへすれば、どんな事でも出來よう。
- (三) どうしてそのやうな事があらうか、心配するな。

(一) 總説

助詞

- 第一類 名詞・數詞・代名詞に添ふもの
- 第二類 動詞・形容詞・助動詞に添ふもの
- 第三類 種々の品詞に添ふもの

練習 一 左の文中の助詞の意味を言へ。

- (一) 私は地理と歴史とを好む。

- (一) 今日は雪だに降りて寒氣加りたり。
 - (二) 大川君と高山君の父に逢ひて語りたり。
 - (三) 甲と乙丙の差の積を求めよ。
 - (四) 若し大業を成さむと欲すれば努力すべし。
 - (五) 吾は波の中へ入りて陸の方に泳ぎたり。
- 二 左の文中に誤あらばこれを正せ。
- (一) 風吹かば花も散らむ。
 - (二) 天氣よければ出發す。
 - (三) 父も母も昨日家に歸られた。
 - (四) 私は明日行くか行かぬか判らない。
 - (五) 二 左の文中に誤あらばこれを正せ。

第八章 副詞

第一節 總説

- 一 彼は書を多く讀みたり。
- 二 彼の志は甚だ善し。
- 三 彼は文を最も早く作る。

右の例で、多くは動詞「讀み」の意味を限定し、甚だは形容詞「善し」の意味を限定し、最もは他の副詞「早く」の意味を限定してゐる。

定義 主として動詞・形容詞及び他の副詞等に副うて、その意味を限定する語を副詞といふ。

第二節 副詞の種類

- 一 はらくと木の葉散る。
 - 二 少しも船體の動搖することがない。
- 右の如く、副詞は他の語句を隔てて、動詞・形容詞等の意味を限定することもある。

副詞

語句を隔てた副詞

本來副詞
轉成副詞

練習

又副詞には恰も聊か必ず忽ち若しなどの如く、本來副詞のものと常にそれ〴〵強ひて多く我ながらの如く、他の品詞より轉成したものもある。

練習 左の文中の副詞を指摘し、その限定してゐる語を言へ。

- (一) 堅く妄りに此の處に出入するを禁ず。
- (二) 聊か感ずる所ありて、専ら實業に従事す。
- (三) 一度決心したる事は必ず成し遂ぐべし。
- (四) 昨日の競走に彼は最も早く決勝點に入つた。
- (五) 私は度々この文を読んだが、まだ諳誦することが出来ない。

第九章 接續詞

第一節 總說

- 一 余は多くの山又川を越えて行く。

接續詞

二 余は書を読み、且文を作れり。

三 余は友に行く。されども暫くして歸る。

右の例で、**又**且**されども**は上下の單語・連語又は文章を接續してゐる。

定義 上下の單語・連語又は文章を接續する語を接續詞といふ。

第二節 接續詞の種類

- 一 太郎はよく勉強す。故に成績宜し。 (順接)
 - 二 春は來ぬ。されども鶯は未だ鳴かず。 (逆接)
- 右の如く、接續詞は上下の適當な事柄を接續するものと、又上下の反對の事柄を接續するものがある。その一を**順接接續詞**といひ、他の一を**逆接接續詞**といふ。

轉來の接續詞

順接接續詞
逆接接續詞

又接續詞は且又尙は副詞より、及びは動詞より、従つてするとは

練習

動詞・助詞の連合より、故に次には名詞・助詞の連合より成立してゐるなど、すべて他の品詞より轉來してゐる。

練習 左の文中の接續詞を指摘し、順接逆接の種類を言へ。

- (一) 今日は文法書を讀み、次いで國語もしくは英語を學ばむ。
- (二) 彼の山は月又雪を觀るに宜し。されど樹木なきを憾む。
- (三) 明日參上仕るべく候間、御在宅下されたく候。
- (四) 空は快く晴れ、それに波さへ穩かであつた。
- (五) 今日も亦彼を訪ねて見た。けれどもまだ歸つて居らない。

第十章 感動詞

- 一 あな嬉し。 あはれ尊し。
- 二 あゝ樂しいかな。 いざ來給へ。
- 三 まあ愛らしい。 やあ驚いた。

感動詞

練習

右の例で、あなあはれあゝいざまあくやあは人の感動の情を表してゐる。

定義 人の感動の情を表す語を感動詞といふ。

練習 左の文中より感動詞を指摘せよ。

- (一) あなあはれ尊き神の宮居かな。
- (二) あつばれ日本一の剛の者なるよ。
- (三) いざく共にかしこに行かまほし。
- (四) おやお珍しい。よくいらつしやいましたね。
- (五) もしくこれはあなたの物ではございませんか。

第十一章 品詞の轉成

品詞はその用法により、或品詞より他の品詞に轉じたものがあつて、これを品詞の轉成といふ。左の通りである。

品詞の轉成

轉成の名詞

- 一 余は長く師の教を受く。
(動詞の連用形より)
- 二 彼は赤と白との旗を持つ。
(形容詞の語根より)
- 三 余は今日近くの家に行く。
(形容詞の連用形より)

第二類 轉成の代名詞

- 一 僕は貴君を友として交らむ。
(名詞より人代名詞に)
- 二 これをあなたに上げます。
(指示代名詞より人代名詞に)

第三類 轉成の副詞

- 一 今日空晴る。
(名詞より)
- 二 はじめよかつた。
(動詞の連用形より)
- 三 長く居つた。
(形容詞の連用形より)

第四類 轉成の接續詞

轉成の副詞

轉成の代名詞

轉成の接續詞

轉成の感動詞

練習

- 一 缺席仕り候間、御届申上げ候。
(名詞より)
- 二 心配致し候處、無事相濟み候。
(名詞より)
- 三 書法及び文法を學んだ。
(動詞の連用形より)

第五類 轉成の感動詞

- 一 萬歳これはおめでたう。
(名詞より)
- 二 どれ私もお伴申ませう。
(代名詞より)
- 三 さて是からどうしようか。
(副詞より)

練習 左の文中の轉成の品詞を指摘せよ。

- (一) 絶えず勉學を怠らず常に父の教に従ふ。
- (二) 始あらざることなく、よく終あること鮮し。
- (三) 祖先の祭を慎み朝夕父母の戒を守る。
- (四) 足下の事業はつまり成功しませう。
- (五) まあ、これは困難である。それでも勉強すれば出来ませう。

第十二章 頭尾語

第一類 接頭語

接頭語

- 一 彼は幸運日に月にいや増す。
 - 二 今日この書を見てた易く知りたり。
 - 三 父と將來の方針をうち合せたり。
 - 四 山上に現れた月はまん圓い。
 - 五 よく注意して體がか弱い人となるな。
- 右の例で、傍線を引いてあるやうに、單獨では用ひられないで、或他の語の上に附いて一語をなすものを接頭語といふ。接頭語には意味を添へるものと添へないものとある。接頭語が附いて出來た語も、やはり元の語と同じ品詞である。

接尾語

第二類 接尾語

- 一 今來られたるは松山君なり。
 - 二 我等の友も今や時めく。
 - 三 いかにも眞心ありげに見ゆ。
 - 四 皆さん男らしい人となりなさい。
 - 五 私は昨日午後花見がてら公園に行つた。
- 右の例で、傍線を引いてあるやうに、單獨には用ひられないで、或他の語の下に附いて一語をなすものを接尾語といふ。接尾語は何れも或意味を添へるものである。接尾語が附いて出來た語は、接尾語の性質によつて種々の品詞となる。
- 練習** 左の文中の接頭語・接尾語を指摘せよ。
- (一) 雪の重みに壓されて、を笹は折れむばかりなり。

練習

- (二) 吹き来る風も春めきて、軒端の梅はやうく、咲きそめたり。
- (三) み山の奥の晝もを暗き森の中を疲れむばかりさまよひけり。
- (四) 散歩がてらちと私の宅にもお出で下さい。
- (五) 弟等は小山の上で友達と楽しげに遊んでゐます。

第五篇 文章

第一章 文の成分

前篇に説き來つた品詞を如何に組立てて文を構成するか、以下順次にこれを説く。

第一節 主語 述語

- 一 人走る。 鳥飛ぶ。 (動作を述べた文)
- 二 空晴る。 風清し。 (作用を述べた文)

主語 述語

客語 補語

三 本居宣長は篤學者なり。 (事柄を述べた文)

右の例の如く、文にはその中の題目となる語があり、又その題目について叙述する語がある。どんな文でもこの二成分を含まぬものはない。

定義 文の中で題目となる語を文の主語といひ、その題目について叙述する語を文の述語又は文の説明語といふ。

第二節 客語 補語

- 一 父財産を子に譲る。 (目的と標準とも具つた文)
- 二 師生徒に文法を教ふ。 (標準と目的とも具つた文)

右の例で、財産を譲るの目的を表し、文法を教ふの目的を表し、子には譲るの標準を表し、生徒には教ふの標準を表してゐる。定義 述語の目的を表す語を文の客語といひ、述語の標準を表

す語を文の補語といふ。

第三節 修飾語

一 輝く月出づ。

(名詞を修飾した文)

二 風涼しく吹く。

(動詞を修飾した文)

三 水甚だ清し。

(形容詞を修飾した文)

右の例で、輝くは體言、月を修飾し、涼しくは用言、吹くを修飾し、甚だは用言、清しを修飾してゐる。

修飾語

定義 文中で他の語を修飾する語を文の修飾語といふ。その

形容詞的修飾語
副詞的修飾語

體言を修飾する語を文の形容詞的修飾語といひ、その用言を修飾する語を文の副詞的修飾語といふ。

第四節 文主

一 東京は人口多し。

(文主のある文)

二 日本は氣候溫和なり。

(右に同じ)

右の例で、東京は日本はは主語の上にあつて、その下の主語述語を總括してゐる。

定義 主語の上にあつて、その下の主語述語を總括する語を文

の主語又は文の總主語といふ。

文
總主語

第五節 獨立語

一 大日本帝國は萬世一系の天皇之を統治す。(提示語ある文)

二 彼は作文を好み、又彼は習字を好む。(接續詞ある文)

三 あはれ彼の心の程や感ぜずべし。(感動詞ある文)

四 さあ兄さん學校に行きませう。(呼掛語ある文)

右の例で、大日本帝國は又あはれさあ兄さんは文の主要語より獨立してゐる。

獨立語

練習

定義 文の主要語より獨立してゐる語を文の獨立語といふ。

練習 左の文中の成分の種類を言へ。

- (一) 日本人は愛國心に富む。
- (二) 目は物を見、耳は聲を聞く。
- (三) 不忍池、詩人は之を小西湖といふ。
- (四) 健全なる精神は健康なる身體に宿る。
- (五) 應援の聲は國民の熱誠が籠つてゐる。

第二章 文の成分の位置

第一類 文の正叙法

- 一 名文は讀者に感動を與ふ。
(位置の正則の文)
- 二 父は種々の書物を高き机に載す。
(右に同じ)
- 三 余の父は身體健康なり。
(右に同じ)

文の正叙法

四 おやあなたも亦弟さんも來ましたね。(右に同じ)

右の例の如く、主語は文の首位に、述語は文の末位に、客語補語は主語と述語との中位に、修飾語は修飾する語の上位に、文主は主語の上位に、獨立語は文の首位にあるが正則の文で、そのやうな位置に叙述する方法を文の正叙法といふ。

第二類 文の倒叙法

- 一 美なるかな、山河の景。
(位置の轉倒の文)
- 二 掘り出したり、金の茶釜を。
(右に同じ)
- 三 賞品を會長が贈與した。
(右に同じ)

右の例の如く、文の語調を整へ、語勢を強めるために、文の成分の位置を轉倒する方法を文の倒叙法といふ。

第三類 文の略叙法

文の倒叙法

文の略叙法

練習

- 一 (余は)明日貴君を訪問せむ。 (主語の省略文)
 - 二 千里の路も一步より(始る)。 (述語の省略文)
 - 三 私は(理由を)知つてゐる。 (客語の省略文)
 - 四 疑あらば(私に)お問ひなさい。 (補語の省略文)
- 右の例の如く、文の冗長を避け、文意を強めるために、文の成分を省略する方法を文の略叙法といふ。

練習 左の文中にある文の倒叙法と文の略叙法とを説け。

- (一) 祝へ諸人もろともに。
- (二) 仰げば高し吾が師の恩。
- (三) 人は誹るとも我は咎めず。
- (四) 論より證據。
- (五) 道路の左側を通行せよ。

第三章 文の句及び節

第一節 文の句

- 一 香のよきは梅の花なり。 (名詞句を含んだ文)
- 二 月の照る夜は快し。 (形容詞句を含んだ文)
- 三 水清ければ川魚見ゆ。 (副詞句を含んだ文)

右の例の傍線を引いた語は、何れも文の獨立を失つて、他の文の一部分となつてゐる。その一例は名詞の用をなし、二例は形容詞の用をなし、三例は副詞の用をなしてゐる。

定義 文の獨立を失つて、他の文の一部分となつてゐるものを文の句といふ。その句の名詞の用をなすものを名詞句といひ、副詞の用をなすものを副詞句といふ。

文の句
名詞句
副詞句

第二節 文の節

- 一 梅の花は家の庭に咲く。
(獨立の文)
 - 二 鶯は梅の枝に來て囀る。
(右に同じ)
 - 三 梅の花は家の庭に咲き、鶯は梅の枝に來て囀る。
(節の文)
- 右の一例と二例とは何れも獨立の文であるが、これを三例の如く重ねれば、又一つの文となる。このやうになつては、上下の傍線の部分が主屬の關係なく、互に對立してゐる。
- 定義** 上下の文の間に主屬の關係なく、互に對立してゐるものを文の節といふ。

文の節
練習

- 練習** 左の文中の句と節とを指摘し、句はその種類の名を言へ。
- (一) 前車の覆るは後車の戒なり。
 - (二) 能ある鷹は爪をかくす。

文の係結

ぞなむ
やか
文の結法

第四章 文の係結

- (三) 水は方圓の器に従ひ、人は善惡の友に因る。
- (四) 氣候寒いけれども、今は春の氣分である。
- (五) 多くの花咲く春は甚だ面白い。

文は通例は用言の終止形で結ぶのであるが、上部にぞなむやか又はこそといふ助詞があれば、それに對して結ぶ語形を換へるのであつて、これを文の係結といふ。

第一類 ぞなむやかの係結

- 一 家ぞ長く榮ゆる。 かの山なむ高き。
(ぞなむの係結)
- 二 月や出でたる。 今誰か行きし。
(やかの係結)

右の例の如く、上にぞなむやかかの助詞があれば、下の結の語を榮

文の結法

こそ

ゆる高きたるしのやうに、活用語の連體形で結ぶが定則である。

第二類 こそその係結

三 家こそ長く榮ゆれ かの山こそ高けれ。(こそその係結)

右の例の如く、上にこそその助詞があれば、下の結の語を榮ゆれ高けれのやうに、活用語の已然形で結ぶが定則である。

附説

(一)「荒き浪風心して吹け。」は動詞の命令形で結び、「かねてより思ひしことぞ。」は助詞で結んでゐるが、此等は上に係の語がないから、文の係結ある語法ではない。

(二)いとよき事にこそ。の如きは、下で結ぶ已然形の語、「あれ」「ありけれ。」などの省略されたものである。

(三)これこそわが身にかゝることなるに、そを知らざりき。の如きは、係の語に對する結の語を省略して、下文に連続せしめた。

練習

練習

一 左の文中の係結を指摘せよ。

- (一) これぞ神國の神國たる所以なる。
- (二) 民をおぼしめす御心に大御衣やぬがせ給ひし。
- (三) 友どちなむ別れがたく思ひて訪ひ來ける。
- (四) あの木をば大納言殿みづからこそ植ゑ給ひしか。
- (五) わればかりかく思ふにや。

二 左の文中に係結の誤あらばこれを正せ。

- (一) かゝる人をぞ眞の偉人といふべし。
- (二) かの地も今は賑はしき町とやなりぬ。
- (三) われはかの人こそはと頼みたれ。
- (四) さてなむ身のほまれといふべし。
- (五) 物のあはれは秋こそまさると人毎にいふめれ。

第五章 文の呼應

文の呼應

練習

- 一 明日若し天氣好くば余も行かむ。 (假定の呼應)
- 二 今聞ゆるは琴の音なり。 (確定の呼應)
- 三 それ何かは難からむ。 (反語の呼應)
- 四 どうしてそんな事があらうか。 (右に同じ)

右の例の如く、文の上下の語句相應じて、その意味を整へることを文の呼應といふ。この呼應は文章上極めて大切である。

練習 一 左の文中の呼應を指摘せよ。

- (一) 若し知らざらば我に問へ。
- (二) 宜しく時に及びて勉勵すべし。
- (三) 思ふに今年も豊作なるべし。
- (四) 昔の人はその心すなほなりき。
- (五) 學生たる者豈勉勵せざるべけむや。

構造上の分類

單文

- 一 左の文中に誤あらばこれを正せ。
- (一) 若し成功すれば大いなる名譽なり。
- (二) たとひ雨降るとも明日は出發す。
- (三) 妄りに入場を禁ず。
- (四) 思はざりき、此の如き好結果あり。
- (五) 恐らくはこの説に反對する人なし。

第六章 文の構造上の種類

文をその構造上より、左の三種に分類することが出来る。

第一類 單文

一 風清し。 父母の恩は山よりも高し。

右の例は、主語と述語との關係が、唯一回成立したばかりの文であつて、此等の文を單文といふ。

複文

第二類 複文

- 一 天氣晴れたれども波高し。
- 二 我は終日母の歸るを待てり。

右の例は文中に句を含み、主語と述語との關係が、二回以上成立してゐる文であつて、此等の文を複文といふ。

第三類 重文

- 一 空晴れ、月出づ。病は口より入り、禍は口より出づ。

右の例は、二つ以上の節より成立してゐる文であつて、此等の文を重文といふ。

第七章 文の性質上の種類

性質上の分類

文をその性質上より、左の四種に分類することが出来る。

重文

第一類 平叙文

- 一 君は君たり、臣は臣たり。(斷定の文)
- 二 近日の中に花も咲き始めよう。(推量の文)

右の例の如く、事實をありのままに述べる文を平叙文といふ。

第二類 疑問文

- 一 雲のいづこに月宿るらむ。(疑問の文)
- 二 どうして黙つて居られよう。(反語の文)

右の例の如く、疑問又は反語の意を表す文を疑問文といふ。

第三類 命令文

- 一 朝は早く起きよ。(命令の文)
- 二 わるい友とは遊ぶな。(禁止の文)

右の例の如く、命令又は禁止の意を表す文を命令文といふ。

疑問文

命令文

第四類 感歎文

- 一 あゝ我が國の軍士は勇なるかな。 (感歎の文)
- 二 やあよく盡力してくれた。 (右に同じ)

感歎文

右の例の如く、感歎の意を表す文を感歎文といふ。

練習

左の文を構造上及び性質上よりその種類を言へ。

- (一) 一寸の光陰も輕んずべからず。
- (二) 嗚呼熱誠なるかな日本國民。
- (三) 此の如き名文は何處にあるか。
- (四) 人も學びて後にこそまことの徳はあらはるれ。
- (五) 用が出来たら手紙を送りませう。

第八章 文章の總括

總括

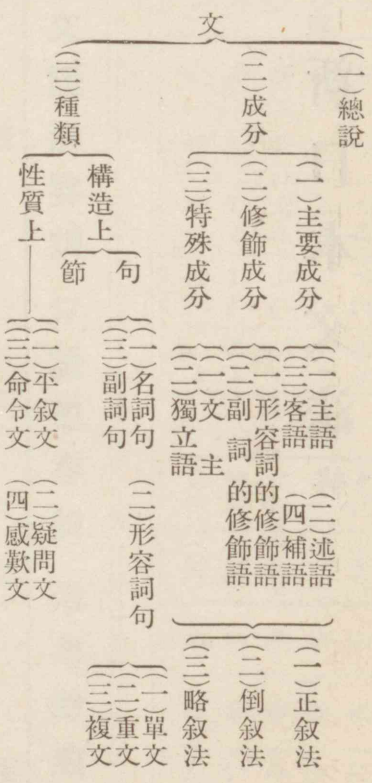
以上の文章の事項を總括すれば左表の通りである。

文の一覽表

練習

練習 一 左の文中の成分を指摘し、又修飾語は何れの語を修飾してゐるかを言へ。

- (一) 頼山陽先生は通稱を久太郎といへり。
- (二) 清少納言よ。香爐峯の雪はいかならむ。
- (三) 何事にも勉むれば、後には成就すべし。
- (四) あゝ花の咲いた木の下に、人が大勢集つて居る。
- (五) 最早人が集つた。それでも懇談會は始らない。



二 左の文中の句と節とを指摘し、又句は何句かを言へ。

- (一) 余は身體に元氣の充つるを覺ゆ。
- (二) 春は花をめ、秋は紅葉をあはれむ。
- (三) 大廈の將に覆らむとするは、一木のよく支ふる所にあらず。
- (四) 無理が通れば道理引込む。
- (五) 頭腦のよい人は一生の利益である。

用上級 新日本文法終

段 二	
ラヤマバハダタ 行行行行行行	終報試延用恥朽
いみびひぢち	
いみびひぢち	
ゆむぶふづつ	
ゆるぶるづる	
ゆるぶるづる	
いみびひぢち	
いみびひぢち	
上	
ワヤマハナカ 行行行行行	(居)(射)(見)(干)(煮)(着)
いみひにき	
いみひにき	
いるみるひるきる	
いるみるひるきる	
いれみひにきれ	
いれみひにきれ	

第二表 文語形容詞・口語形容詞活用對照表

文 語		口 語	
活用	語	活用	語
し く 活用	樂	し く 活用	樂
く 活用	清	く 活用	清
未然	終止	未然	終止
連用	連體	連用	連體
終止	已然	終止	假定
連體	命令	連體	命令
し く	し く	し く	し く
し	し	しい	しい
しき	き	しい	い
れしけ	けれ	れしけ	けれ
○	○	○	○

第一表 文語動詞・口語動詞活用對照表

下		段 二 上		段 四		用 活																	
ガ	サ	バ	ハ	タ	ガ	ラ	マ	バ	ハ	タ	サ	ガ	カ										
行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行										
(得)		懲	報	試	延	用	恥	朽	過	生	送	好	學	思	分	記	仰	開					
て	せ	げ	け	え	り	い	み	び	ひ	ち	ち	ぎ	き	ら	ま	ば	は	た	さ	が	か		
て	せ	げ	け	え	り	い	み	び	ひ	ち	ち	ぎ	き	り	み	び	ひ	ち	し	ぎ	き		
つ	す	ぐ	く	う	る	ゆ	む	ぶ	ふ	づ	つ	ぐ	く	る	む	ぶ	ふ	つ	す	ぐ	く		
つ	す	ぐ	く	う	る	ゆ	む	ぶ	ふ	づ	つ	ぐ	く	る	む	ぶ	ふ	つ	す	ぐ	く		
つ	す	ぐ	く	う	る	ゆ	む	ぶ	ふ	づ	つ	ぐ	く	れ	め	べ	へ	て	せ	げ	け		
て	せ	げ	け	え	り	い	み	び	ひ	ち	ち	ぎ	き	れ	め	べ	へ	て	せ	げ	け		
段	一	上		段 四		用 活																	
マ	バ	ハ	ダ	タ	ガ	カ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	カ	ラ	ラ	マ	バ	ハ	ナ	タ	サ	ガ	カ	
行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行
(着)		試	延	用	恥	朽	過	生	(居)	(射)	(見)	(干)	(煮)	有	送	好	學	思	死	分	記	仰	開
み	び	ひ	ち	ち	ぎ	き	ゐ	い	み	ひ	に	き	ら	ら	ま	ば	は	な	た	さ	が	か	
み	び	ひ	ち	ち	ぎ	き	ゐ	い	み	ひ	に	き	り	り	み	び	ひ	に	ち	し	ぎ	き	
み	び	ひ	ち	ち	ぎ	き	ゐ	い	み	ひ	に	き	る	る	む	ぶ	ふ	ぬ	つ	す	ぐ	く	
み	び	ひ	ち	ち	ぎ	き	ゐ	い	み	ひ	に	き	る	る	む	ぶ	ふ	ぬ	つ	す	ぐ	く	
み	び	ひ	ち	ち	ぎ	き	ゐ	い	み	ひ	に	き	れ	れ	め	べ	へ	ね	て	せ	げ	け	
み	び	ひ	ち	ち	ぎ	き	ゐ	い	み	ひ	に	き	れ	れ	め	べ	へ	ね	て	せ	げ	け	

文

語

口

語

第二表 文語形容詞・口語形容詞活用對照表

しく活用	く活用	活用		文
		根	語	
樂	清	未然	語	語
しく	く	連用	活用	
し	し	終止	用	
しき	き	連體	形	
れしけ	けれ	已然	形	
○	○	命令	形	
しく活用	く活用	活用		口
		根	語	
樂	清	未然	語	語
○	○	連用	活用	
しく	く	終止	用	
しい	い	連體	形	
れしけ	けれ	假定	形	
○	○	命令	形	

格 變		段 一 上	段 二 下		段 二 上		段																																		
ラ行	ナ行	サ行	カ行	カ行	ワ行	ヤ行	マ行	ハ行	ナ行	カ行	ワ行	ヤ行	マ行	ハ行	ナ行	カ行	ラ行	マ行	ハ行	ナ行																					
有	死	(爲)	(來)	(蹴)	(居率)	(射)	(見鑑)	(干)	(煮)	(着)	据流消責較	兼撫企交載投授	(得)	懲報試延用恥朽過生	送好學思																										
ら	な	せ	こ	け	ゐ	い	み	ひ	に	き	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え	り	い	み	び	ひ	ぢ	ち	ぎ	き	ら	ま	ば	は	な			
り	に	し	き	け	ゐ	い	み	ひ	に	き	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え	り	い	み	び	ひ	ぢ	ち	ぎ	き	り	み	び	ひ	な			
り	ぬ	す	く	ける	ゐ	い	み	ひ	に	き	う	る	ゆ	む	ぶ	ふ	ぬ	づ	つ	ず	ず	ぐ	く	う	る	ゆ	む	ぶ	ぶ	づ	づ	ぐ	く	る	む	ぶ	ふ	ぬ			
る	ぬ	する	くる	ける	ゐ	い	み	ひ	に	き	う	る	ゆ	む	ぶ	ふ	ぬ	づ	つ	ず	ず	ぐ	く	う	る	ゆ	む	ぶ	ぶ	づ	づ	ぐ	く	る	む	ぶ	ふ	ぬ			
れ	ぬ	す	くれ	けれ	ゐ	い	み	ひ	に	き	う	る	ゆ	む	ぶ	ふ	ぬ	づ	つ	ず	ず	ぐ	く	う	る	ゆ	む	ぶ	ぶ	づ	づ	ぐ	く	れ	め	べ	へ	ぬ			
れ	ね	せよ	こよ	けよ	ゐ	い	み	ひ	に	き	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え	り	い	み	び	ひ	ぢ	ち	ぎ	き	れ	め	べ	へ	ぬ			
格 變	段 一 下					段 一 上					段																														
サ行	カ行	ワ行	ラ行	ヤ行	マ行	バ行	ハ行	ナ行	ダ行	タ行	ザ行	サ行	ガ行	カ行	ア行	カ行	ラ行	ヤ行	マ行	ハ行	ナ行	カ行	ラ行	マ行	ハ行	ナ行	カ行	ラ行	マ行	ハ行	ナ行	カ行	ラ行	マ行	ハ行	ナ行	カ行	ラ行	マ行	ハ行	ナ行
(爲)	(來)	据流消責較	兼撫企交載投授	(得)	(蹴)	懲報試延用恥朽過生	(居)	(射)	(見)	(干)	(煮)	(着)	有送好學思死																												
し	せ	こ	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え	り	い	み	び	ひ	ぢ	ち	ぎ	き	ゐ	い	み	ひ	に	き	ら	ら	ま	ば	は	な	な			
し	き	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え	り	い	み	び	ひ	ぢ	ち	ぎ	き	ゐ	い	み	ひ	に	き	り	り	み	び	ひ	に	に	に			
する	くる	ゑ	れる	え	める	べる	へ	ね	で	てる	せる	せる	げる	ける	える	ける	り	い	みる	び	ひ	ぢ	ち	ぎ	きる	ゐ	い	みる	ひ	に	きる	る	る	む	ぶ	ふ	ぬ	ぬ			
する	くる	ゑ	れる	え	める	べる	へ	ね	で	てる	せる	せる	げる	ける	える	ける	り	い	みる	び	ひ	ぢ	ち	ぎ	きる	ゐ	い	みる	ひ	に	きる	る	る	む	ぶ	ふ	ぬ	ぬ			
す	くれ	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え	り	い	み	び	ひ	ぢ	ち	ぎ	き	ゐ	い	み	ひ	に	き	れ	れ	め	べ	へ	ぬ	ぬ				
し	せ	こ	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ	せ	げ	け	え	り	い	み	び	ひ	ぢ	ち	ぎ	き	ゐ	い	み	ひ	に	き	れ	れ	め	べ	へ	ぬ	ぬ			

量	計	算	書	算	算
1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30
31	32	33	34	35	36
37	38	39	40	41	42
43	44	45	46	47	48
49	50	51	52	53	54
55	56	57	58	59	60
61	62	63	64	65	66
67	68	69	70	71	72
73	74	75	76	77	78
79	80	81	82	83	84
85	86	87	88	89	90
91	92	93	94	95	96
97	98	99	100		

しむ
しめ
しめ
しむ
しむる
しむれ
しめ
よ

しむる
しむれ
しめ
よ

昭和九年一月十七日
文部省檢定
中學國語文教科用

昭和八年七月廿五日印
昭和八年七月廿八日發行
昭和八年十二月廿四日訂正再版發行

發行所

著者權所有

東京市神田區神保町二丁目十番地
電話替口座東京二一六九一
信箱略段一三一〇番
號(ヤマウ)

印刷者 小笠原秀雄

發行者 來島正時

東京市神田區神保町二丁目十番地
東京市神田區錦町三丁目十一番地

著者 佐藤正範

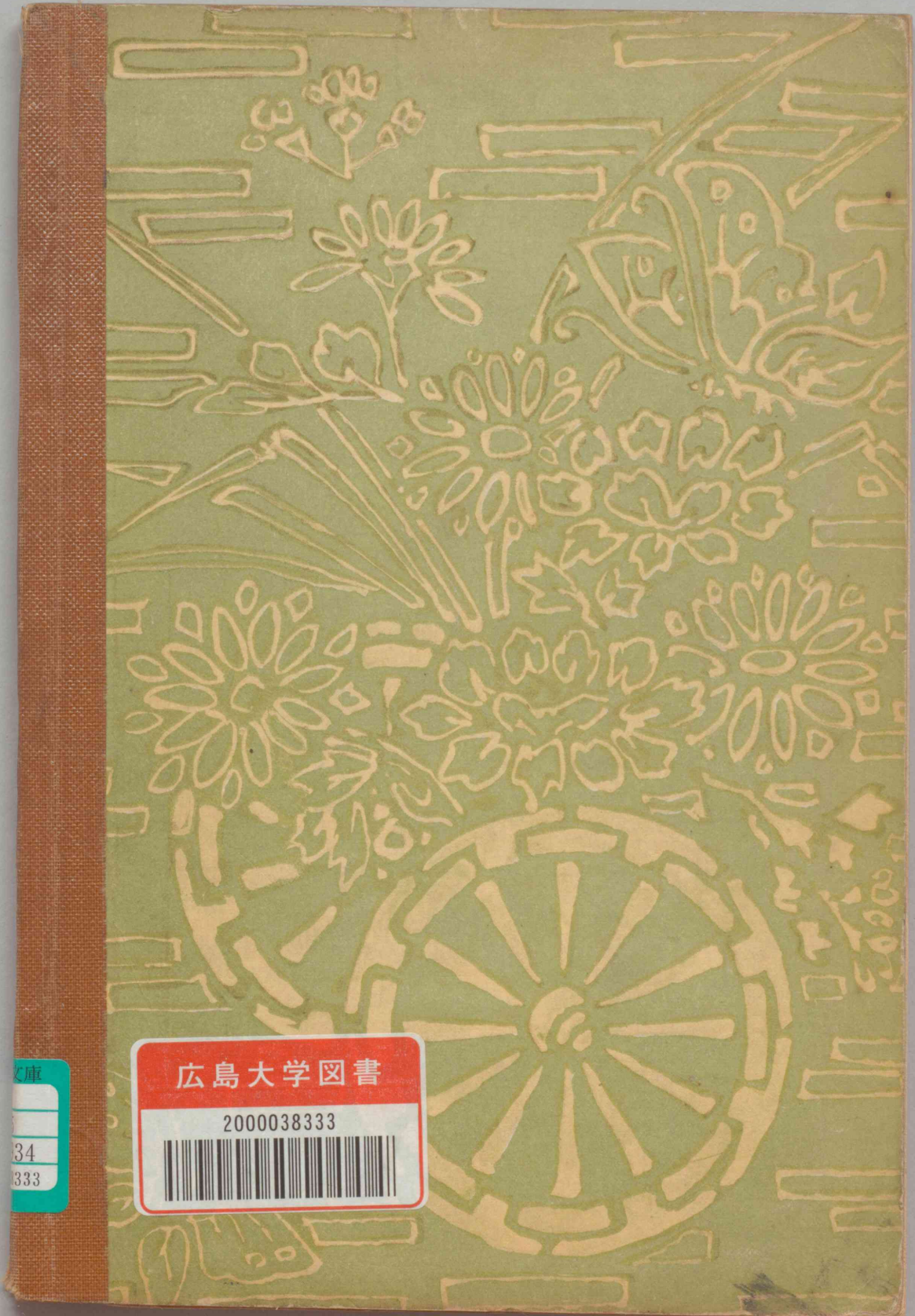
東京市澁谷區幡ヶ谷本町一丁目十番地

上級用新日本文法

定價金五拾錢

山海堂出版部

贈



文庫
34
333

広島大学図書
2000038333
